六所家総合調査報告書

埋蔵文化財②

2016年3月

富士市教育委員会

序

富士市教育委員会では、平成17年に故六所五郎氏・利子氏より、市内今泉八丁目に所在する六所邸主屋や宝蔵等の建物および、それら建物に残されていた、古文書・書画・民具等の資料一式の寄贈を受けました。これを受けて、平成18年度に郷土資料（六所家旧蔵）基礎整理委員会、平成19年度からは六所家総合調査委員会を設け、各委員の御指導のもと、資料の整理・調査を行ってまいりました。

六所家は、明治政府による神仏分離政策によって還俗するまでは、富士山東泉院という寺院を営んでいました。また、明治時代以降はこの地域の有力者として活動することとなります。それゆえに、六所家に伝来した資料は、郷土の歴史・文化を解明するため、大変貴重な情報源であるといえます。

このたび、刊行するはこびとなりました埋蔵文化財分野では、平成19年度より継続的な発掘調査を行ってまいりました。発掘調査では、東泉院の建物の一部や近代の富士病院廃院後の土地造成の痕跡など、文書に残された事柄を考古学的手法により裏付けることに加え、記録に残されない人々の活動が明らかになりました。また、出土品の整理作業を通じて、国内でも出土事例の少ない時期の中国景徳鎮窯産の碗などの存在も明らかとなりました。今後は、これらの調査成果を広く市民の皆様に伝えていくとともに、学術資料として保管・活用してまいりたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査に際して多くのご協力をいただきました六所家の御親族や関係者の皆様に深くお礼申し上げるとともに、調査および本書の作成に際して、御多忙の中ご尽力いただきました諸先生ならびに関係された皆様に感謝の意を表する次第です。あわせて、今後もなお一層の御指導、御協力を賜りますようお願い申し上げ、発刊の言葉といたします。

平成28年3月
富士市教育委員会
教育長　山田幸男

例　言

1　本書は、富士市教育委員会において、平成19年度より実施している六所家総合調査にともなう調査報告書のうち、埋蔵文化財編②として平成28年3月31日に刊行されたものである。

2　六所家総合調査に至るまでの経緯は次のとおりである。

平成17年、六所五郎氏・利子氏より市内今泉八丁目に所在する六所邸主屋や土蔵等の建屋および、それら建屋に残されていた、六所家およびその前身である東泉院という寺院にかかわる古文書・書画・民具等の資料一式について寄贈の申し入れがあった。申し入れを受け、富士市教育委員会では、主屋および土蔵から富士市立伝法小学校および富士市立博物館へと資料を移動し、基礎的な資料の分類を実施した。

平成18年度には、富士市立博物館において、若林淳之（静岡大学名誉教授）・丸茂諶祥（元立正大学講師）・植松章八（元富士市文化財保護審議会委員）・松田香代子（愛知大学非常勤講師）からなる郷土資料（六所家旧蔵）基礎整理委員会を組織し、委員会の指導のもと、基礎的な整理作業を実施した。それとともに、富士市教育委員会文化振興課では、石川薫一級建築設計事務所に委託を行い、六所邸建屋の現況を把握し、記録保存を図ることを目的とした建物調査を実施した。

これらの事業の成果に基づき、六所家およびその前身である東泉院にかかわる古文書、書画、民俗、富士山信仰、埋蔵文化財、建造物・庭園の各分野について総合的に調査する六所家総合調査事業が平成19年度に立ち上げられ、この調査事業の主体となる六所家総合調査委員会が組織された。

3　六所家総合調査委員会の組織は以下の通りである。

会　長　若林淳之（故人）　静岡大学名誉教授　（平成19年度～21年度）
　　丸茂諶祥　元立正大学講師（平成22年度～現在）
副会長　丸茂諶祥　元立正大学講師（平成19年度～21年度）
　　湯之上隆　静岡大学教授（平成22年度～23年度）
　　植松章八　元富士市文化財保護審議会委員（平成24年度～現在）
委　員　植松章八　元富士市文化財保護審議会委員（平成19年度～平成23年度）
　　建部恭宣　富士市文化財保護審議会委員（平成19年度～現在）
　　松田香代子　愛知大学非常勤講師（平成19年度～現在）
　　菊池邦彦　東京都立産業技術高等専門学校教授（平成22年度～現在）
　　前田利久　清水国際高等学校教諭（平成24年度～現在）
事務局　富士市市民部文化振興課・富士市立博物館

4　考古学的側面については、植松章八氏（六所家総合調査委員会副会長）、建築学的側面については建部恭宣氏（六所家総合調査委員会委員）より指導を受けた。

5　本書の執筆・編集は、佐藤祐樹（富士市役所市民部文化振興課上席主事）が行い、第3章第1節は金子　智氏（高浜市かわら美術館）より玉稿を賜った。

6　掲載した写真は、佐藤が撮影した。

7　掲載した出土遺物の実測図は、大成エンジニアリング株式会社に委託した。

8　調査において出土した遺物や図面、写真は富士市埋蔵文化財調査室において保管している。

9　出土した土器・陶磁器のうち中世は池谷初恵氏に、近世以降については堀内秀樹氏に年代的位置づけを御教示頂いた。
出土した瓦については金子　智氏に御教示いただいた。また、本書作成に際し、主に以下の文献を参考にした。

愛知県 2007『愛知県史』別編（窯業２　中世・近世　瀬戸系）
愛知県 2012『愛知県史』別編（窯業３　中世・近世　常滑系）
加藤　晃・金子　智 1990「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』第３分冊　考察編　東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4
金子　智 1993「近世瓦の基本分類」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第 20 集　哲学・史学編
大成可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（２）－器種（小器種）の出土状況－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』 7
東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類』（１）
堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』 1

10　埋蔵文化財調査および報告書作成にあたって、次の方々に多大な御協力をいただいた（敬称略）。
池谷初恵　植松章八　　金子　智　堀内秀樹　六所芳和　渡井一信、渡井英誉

目　次

口　絵
序
例　言
目　次

第１章　調査の経緯と経過
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第３節　調査の体制 …… 4

第２章　絵図にみる建物と時期設定
第１節　歴史資料から明らかとなっている建物 …… 5
第２節　主屋を中心とした東泉院の時期区分 …… 8

第３章　発掘調査成果
第１節　第１面の遺構・遺物 …… 9
第２節　第２面の遺構・遺物 …… 12
第３節　第３面の遺構・遺物 …… 41

第４章　考察
第１節　六所家敷地内出土瓦の様相 …… 48
第２節　考古学的視点から見た東泉院の民俗資料 …… 55
第３節　東泉院出土灯明皿の自然科学分析 …… 63

第５章　総括 …… 67

写真図版

挿図目次

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

第１図　本発掘調査箇所 …… 1

第２節　調査の経過

第２図　富士山周辺の浅間神社と登山道 …… 2

第３図　下方五社と東泉院の位置 …… 3

第３節　調査の体制

第４図　調査位置図 …… 4

第２章　絵図にみる建物と時期設定

第１節　歴史資料から明らかとなっている建物

第５図　元文５年絵図 …… 5

第６図　元文５年絵図（アップ） …… 5

第７図　寛政２年絵図 …… 6

第８図　文久２年絵図 …… 6

第９図　文久２年建物 …… 6

第１０図　明治４年絵図 …… 7

第１１図　文久２年絵図と現図面の合成 …… 7

第２節　主屋を中心とした東泉院の時期区分

第１２図　主屋（建物④）平面図 …… 8

第３章　発掘調査成果

第１節　第１面の遺構・遺物

第１３図　第１面全景（北西から） …… 9

第１４図　礎石掘り方 …… 10

第１５図　主屋土間　検出（南から） …… 11

第１６図　礎石　掘り方検出（北東から） …… 11

第１７図　十三ノ一礎石　掘り方検出（南西から） …… 11

第１８図　十三ノ四礎石　掘り方検出（北西から） …… 11

第１９図　十三ノ七礎石　掘り方検出（南から） …… 11

第２０図　大黒柱（ハノヒ）　掘り方（北西から） …… 11

第２節　第２面の遺構・遺物

第２１図　作業風景（大礫廻除去） …… 12

第２２図　墨書のある礎石 …… 12

第２３図　作業風景（ＳＫ６０１） …… 12

第２４図　ＳＫ６０１　瓦検出状況 …… 12

第２５図　第２面　全体図（一部第３面合成） …… 13

第２６図　調査区土層断面（１） …… 14

第２７図　調査区土層断面（２） …… 15

第２８図　調査区土層断面（３） …… 16

第２９図　ＳＳ６０１・ＳＳ６０２・ＳＳ６０３・ＳＳ６０７ … 17

第３０図　ＳＳ６０４・ＳＳ６０５・ＳＳ６０６ …… 18

第３１図　ＳＳ６０１検出状況 …… 18

第３２図　ＳＳ６０４～ＳＳ６０６検出状況 …… 18

第３３図　ＳＫ６０１　遺物検出状況 …… 19

第３４図　ＳＫ６０１ …… 20

第３５図　ＳＫ６０１　遺物検出状況（南東から） …… 20

第３６図　ＳＫ６０１完掘（南西から） …… 20

第３７図　ＳＫ６０１出土遺物（１） …… 21

第３８図　ＳＫ６０１出土遺物（２） …… 22

第３９図　ＳＫ６０１出土遺物（３） …… 23

第４０図　ＳＫ６０１出土遺物（４） …… 24

第４１図　ＳＫ６０１出土遺物（５） …… 25

第４２図　ＳＫ６０１出土遺物（６） …… 26

第４３図　ＳＫ６０１出土遺物（７） …… 27

第４４図　ＳＫ６０１出土遺物（８） …… 27

第４５図　Ｐｉｔ６０１・Ｐｉｔ６０２ …… 28

第４６図　ＳＸ６０１周辺遺物出土状況 …… 29

第４７図　ＳＸ６０１出土遺物（１） …… 29

第４８図　ＳＸ６０１出土遺物（２） …… 30

第４９図　ＳＸ６０２出土遺物 …… 30

第５０図　ＳＸ６０３ …… 31

第５１図　ＳＸ６０３（北西から） …… 31

第５２図　ＳＸ６０４・ＳＸ６０５ …… 32

第５３図　第２面　北西ブロック遺物出土状況 …… 33

第５４図　第２面出土遺物（１） …… 34

第５５図　第２面出土遺物（２） …… 35

第５６図　第２面出土遺物（３） …… 36

第５７図　第２面出土遺物（４） …… 37

第５８図　第２面出土遺物（５） …… 38

第５９図　第２面出土遺物（６） …… 39

第６０図　第２面出土遺物（７） …… 40

第６１図　第２面出土遺物（８） …… 40

第３節　第３面の遺構・遺物

第６２図　ＳＸ６０６の北側土壇 …… 41

第６３図　ＳＸ６０６ …… 41

第６４図　Ｐｉｔ６０３～Ｐｉｔ６１０ …… 42

第６５図　第３面ピット検出状況（南から） …… 43

第４章　考察

第１節　六所家敷地内出土瓦の様相

第６６図　ＳＫ６０１出土瓦のセット関係 …… 51

第６７図　これまでに出土した瓦 …… 52

第２節　考古学的視点から見た東泉院の民俗資料

第６８図　民俗資料データベース（本書１３７の資料） …… 55

第６９図　民具資料（１） …… 56

第７０図　民具資料（２） …… 57

第７１図　民具資料（３） …… 58

第７２図　民具資料（４） …… 59

第７３図　民具資料（５） …… 60

第７４図　民具資料（６） …… 61

第３節　東泉院出土灯明皿の自然科学分析

第７５図　Ｘ線回折図 …… 64

第７６図　ＦＴ-ＩＲ　スペクトル …… 65

第５章　総括

第７７図　検出された建物跡 …… 67

挿表目次

第２章　絵図にみる建物と時期設定

第２節　第２面の遺構・遺物

第１表　ＳＫ６０１出土瓦組成 …… 27

第３章　発掘調査成果第３節　発掘調査成果

第３節　第３面の遺構・遺物

第２表　出土遺物観察表 …… 44

第４章　考察

第２節　考古学的視点から見た東泉院の民俗資料

第３表　民具資料観察表 …… 62

第３節　東泉院出土灯明皿の自然科学分析

第４表　Ｘ線回折測定条件 …… 63

第５表　ＦＴ-ＩＲ測定条件 …… 63

第５章　総括

第６表　東泉院の歴史と埋蔵文化財調査成果 …… 68

写真図版目次

PL.1　調査
1．第２面全景（北西から）
2．全景　黒色土検出（南東から）
PL.2　調査
1．ＳＳ６０１（四ノ十二礎石）セクション（西から）
2．ＳＳ６０３（七ノ十一礎石）検出（北西から）
3．ＳＳ６０２（六ノ十一礎石）検出（北西から）
4．ＳＸ６０３　全景（北西から）
5．ＳＸ６０３（北西から）
PL.3　調査
1．ＳＸ６０２　検出（北東から）
2．ＳＸ６０２　検出（北東から）
3．ＳＸ６０１　検出（北東から）
4．29Tr　南北セクション東壁（北西から）
5．ＳＸ６０２　検出（北東から）
PL.4　調査
1．第２面検出全景（南西から）
2．ＳＸ６０４・ＳＸ６０５　検出（北西から）
3．ＳＸ６０５　検出（北から）
4．ＳＸ６０５　南北セクション西壁（北東から）
5．ＳＸ６０４　検出（南から）
6．ＳＸ６０４　南北セクション東壁（西から）
PL.5　調査
1．ＳＫ６０１　検出（南東から）
2．ＳＫ６０１　南北セクション西壁（南から）
3．ＳＫ６０１　瓦検出（南西から）
4．ＳＫ６０１　南北セクション西壁（南東から）
PL.6　調査
1．ＳＸ６０６　検出（南西から）
2．ＳＸ６０６　東西セクション北壁（南から）
3．ＳＸ６０６ＳＫ１　完掘（南東から）
PL.7　調査
1．埋め戻しの様子
2．ＳＳ６０２　埋め戻し（北東から）
3．ＳＸ６０３　埋め戻し（北西から）
4．調査区　埋め戻し（南東から）
5．調査区　埋め戻し（南東から）
6．調査区　埋め戻し（南西から）
7．調査地　現況（北東から）
8．調査地　現況（北西から）
PL.8　遺物
ＳＫ６０１出土遺物
ＳＸ６０１出土遺物
PL.9　遺物
ＳＸ６０１出土遺物
ＳＸ６０２出土遺物
第２面出土遺物
PL.10～PL.12
第２面出土遺物
PL.13　　民具

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

調査経緯

平成 24 年度までに行った善得寺城跡・東泉院跡の発掘調査成果については、平成 26 年３月に刊行した『六所家総合調査報告書　埋蔵文化財』において既に報告している。本書は平成 25 年度に行った本発掘調査の報告にあたる。

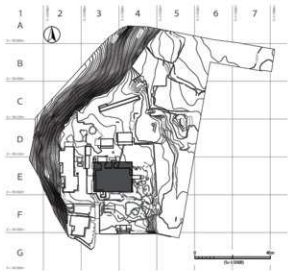
平成 19 年に組織された六所家総合調査委員会における埋蔵文化財の位置づけは、大きく異なる二つの側面を有していた。

ひとつ目は、敷地内における発掘調査によってこの地に存在した東泉院の痕跡を確認し、古文書、建造物などの他分野の調査成果とともにその実態を明らかにすることである。そのため、調査は破壊を前提とした調査とは異なり、基本的に遺構を残し、完掘しない調査方法を採用してきた。その成果は冒頭に述べたように、平成 26 年に報告した通りである。

ふたつ目は、吉原公園の整備という開発に対応した調査である。六所家の敷地は、西側に隣接する吉原公園と共に整備することが決まっていた。そのため、敷地内に存在することが想定される埋蔵文化財についての時代、内容、深さなどの情報を得る必要があった。

以上のような性格の異なる側面を有しており開発に対応した記録保存調査の成果は別に報告することとした。

平成 19 年度から平成 24 年度まで行った敷地内の埋蔵文化財の成果をもとに、富士市役所都市整備部みどりの課では、吉原公園の整備計画を策定し、平成 25 年４月２日、文化財保護法第 94 条に基づき、「埋蔵文化財発掘の通知書」を文化振興課に提出した。提出された工事計画は、これまでに検出された遺構に直接的な影響を与えないように計画してあったものの、平成 24 年に解体された主屋の存在を示す園路などの設置には、十分な保護層が確保されないため、平成 25 年６月７日、静岡県教育委員会教育長より、保護の図れない部分については本発掘調査を実施するよう指示がなされた。調査範囲は、解体された主屋部分とほぼ一致する範囲にあたる。



第１図　本発掘調査箇所

第２節　調査の経過

本発掘調査は平成 25 年５月 31 日に開始した。286.557㎡を発掘調査し、９月 24 日に終了した。調査は、現状の地面を第１面と捉え、第２面、第３面と分けて層位的に行った。それぞれの面の時代については後述する。異常気象に悩まされ、調査はなかなか進展しなかった。以下、調査経過を簡単に記録しておく。

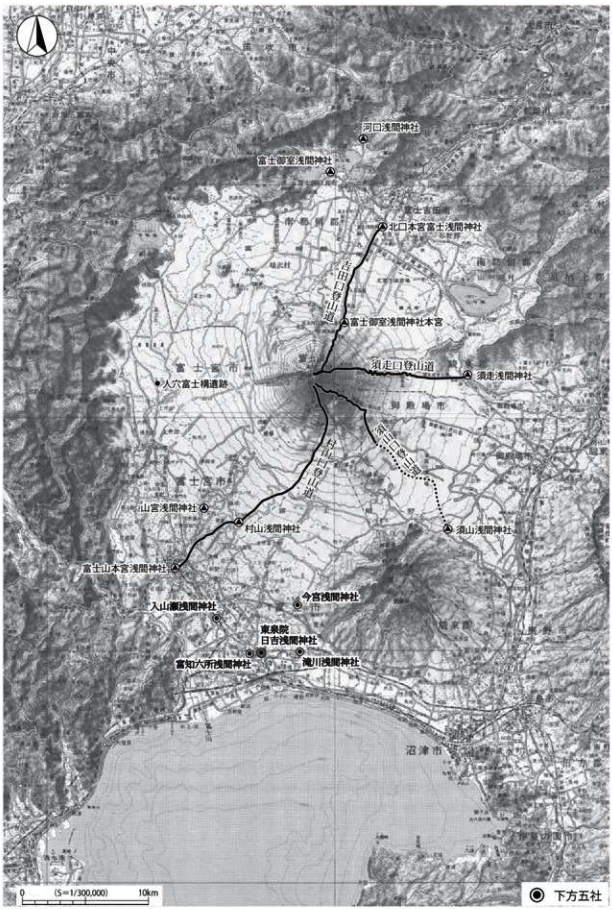
5月31日　土間部分のコンクリート除去、草刈り

6月４日　第１面の清掃

6月５日　土間、門写真撮影。玄関入り口部分の敷石の保存のため、石に番号を付与して埋蔵文化財調査室に移動・保管。

6月10日　第１面建物の大黒柱などの礎石掘り方調査開始。門石垣実測開始。

6月14日　礎石掘り方写真撮影。ＴＳ計測。



第２図　富士山周辺の浅間神社と登山道

6月17日　調査区を４ブロックに区分し、十字の土層観察用のベルトを残したまま、第２面を目指し、掘削開始。人頭大の溶岩を除去することで第２面が検出されるため、上半部の除去には重機（バックホー）を使用する。あわせて人力による下半部の礫除去、精査開始。

6月24日　南西のブロックで、礫除去後に建物の礎石と考えられる平らな川原石を検出。表面に墨で建物の番付が観察される。

6月25日　北西ブロックで礫除去。灯明皿が数多く出土。

6月28日　重機による礫上半部の除去終了。

７月１日　石垣図面完了。第２面精査、レベリング。

７月８日　人力による礫下半部の除去終了。

７月11日　第２面遺構掘削開始。瓦廃棄土坑（SK601）の掘削。大量に廃棄された瓦出土。

7月18日　高所作業車により第２面全景写真撮影。

7月29日　SK601の瓦について高浜市かわら美術館　金子　智氏の調査指導。

7月30日　先行して北西ブロックから第３面を目指し、掘削開始。第３面を目指して掘削中に遺物多数出土。

7月31日　第２面において検出された建物礎石に残された番付の解読について富士市立博物館学芸員に調査協力を求める。

８月２日　16日まで休工。

8月21日　第２面の建物規模がおおよそ判明。

8月22日　前日のゲリラ豪雨のため、調査区水没。

8月23日　写真撮影と並行してＴＳ計測。

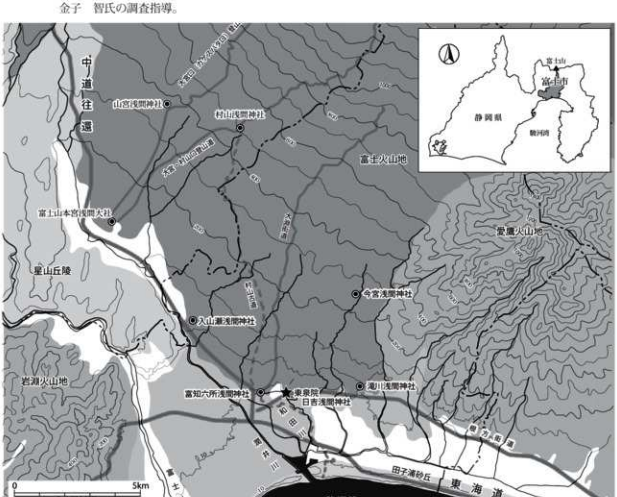
8月29日　六所家総合調査委員会終了後に委員による現場視察。

９月２日　富士宮市教育委員会渡井一信氏、渡井英誉氏現場見学。

9月11日　器材撤収。

9月23日　埋め戻し開始。

9月24日　埋め戻し完了。



第３図　下方五社と東泉院の位置

第３節　調査の体制

【発掘調査】　平成 25 年度

〔調査主体〕　富士市教育委員会　教育長　山田幸男
教育次長　加納孝則

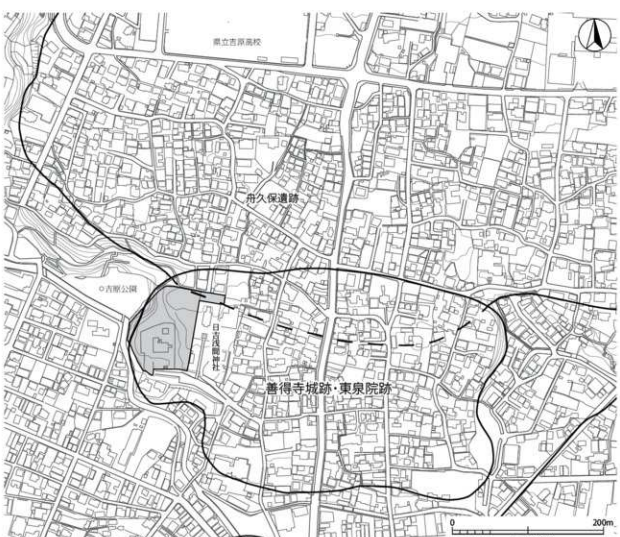
〔担当機関〕　文化振興課　課長　渡井義彦
文化財担当　主幹　前田勝己
主査　石川武男
調査担当者　上席主事　佐藤祐樹
臨時職員　石川郁久子
杉原範美
望月真弓
渡辺美規子

発掘作業員　社団法人富士市シルバー人材センター

【整理作業】　平成 27 年度

〔作業主体〕　富士市教育委員会　教育長　山田幸男

〔担当機関〕　富士市役所市民部　部長　加納孝則
文化振興課　課長　町田しげ美
文化財担当　統括主幹　前田勝己
専門員　渡井義彦
主査　石川武男
整理担当者　上席主事　佐藤祐樹
臨時職員　稲葉万智子　井上尚子
小田貴子　金田純子
石川郁久子　牧野かおり
望月真弓　渡辺美規子



第４図　調査位置図

第２章　絵図にみる建物と時期設定

第１節　歴史資料から明らかとなっている建物

東泉院歴代の住持の事跡をもとに、どのような建物が存在したのかを整理しておくと以下のようになる。

【　】内が歴代住持

慶長 17 年（1612）

六所浅間宮宝殿・拝殿、東泉院門を建立。【快印】

（1624 ～ 1647）

東泉院中門を建立。【快温】

（1647 ～ 1661）

東泉院衆殿を建立。【快盛】

（1673 ～ 1685）

東泉院台所・土蔵を建立。【快雅】

（1685 ～ 1691）

六所宮天神社・弁財天を造立、風呂屋を建立。【覚胤】

（1691 ～ 1698）

東泉院黒門・禁制札を建立。子安地蔵堂・庵室を造替。【圓成】

（1704 ～ 1709）

東泉院境内の弁才天祠再建、子安地蔵堂・庵室を造立。

東泉院客殿等を修復、文庫・経蔵を造替。【精海】

延享４年（1747）

不動五大尊護摩堂を造営。【光盛】

第５図　元文５年絵図

（1782 ～ 1791）

東泉院庫裏・米蔵を再建。【隆尊】

寛政２年（1790）

火災により客殿等焼失。【隆尊】

寛政５年（1793）

東泉院聖天堂を再建。【尊淳】

寛政９年（1797）

東泉院客殿を再建。【尊淳】

享和３年（1803）

東泉院大玄関を再建。【隆応】

（1806 ～ 1812）

井戸積みのため、伊豆石七両分調達。【慈舩】

安政４年（1857）

宝蔵を再建、庫裏を造立。【藝雄】

文久２年（1862）

本堂（護摩堂・歓喜堂）と東照大権現御宮を譜代。【藝雄】

明治 10 年頃（1877）

主屋建設のための準備開始

そのほかにも、絵図や棟札などからみる東泉院の姿について杉山（2008）や建部（2009）による詳細な検討がある。

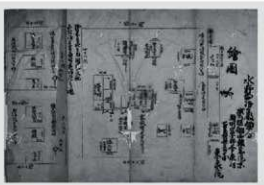
まず、注目されるのが、元文５年（1740）である。これは安永７年（1778）に写されたものの可能性が考えられるが、建物の状況としては元文５年の状況が描かれていると解釈されるという（建部 2009）。ここでは

第６図　元文５年絵図（アップ）

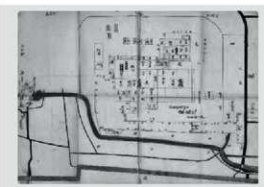
東泉院の内部の間取りが簡単に描かれ、９棟の建物（東泉院、中門、惣門、東泉院隠居所下屋敷、御供所、本堂、御祈祷所、地蔵堂、八幡）が記されている。事跡では、その頃に建物が建てられた記録はなく、一番近くて、1704 年から 1709 年まで第 10 代住持を勤めた精海が、東泉院客殿等を修復、文庫・経蔵を造替したという。修復であることから、さらに遡ると、1647 年から 1661 年に第４代住持快盛が、東泉院衆殿を建立したとされるが、この建物が、元文５年（1740）に描かれた建物なのかは明らかでない。

次に注目されるのが寛政２年（1790）の絵図である。これには、客殿と台所は二つに分けられており、九間に七間半の客殿であったようである。寛政２年は第 15 代住持隆尊の頃であるが、火災により客殿等が焼失している。その後の再建は寛政９年（1797）と考えられることから、描かれているのは寛政２年に火災により焼失した客殿（朱殿・主屋）と考えられる。しかし、この火災で焼失した建物が、元文５年（1740）の絵図に描かれている建物と同じなのか、事跡として残されていない客殿なのかは現状では判断できない。

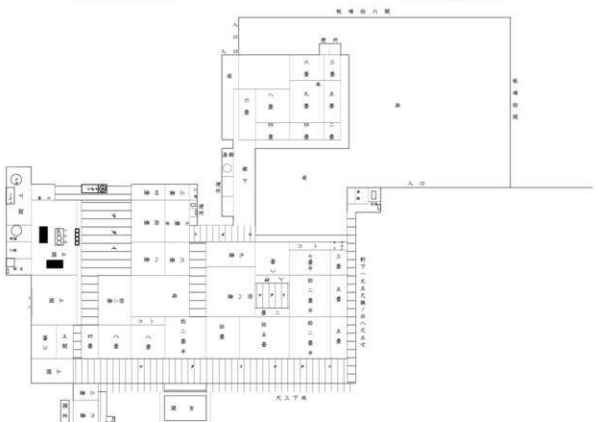
次に東泉院の主屋が絵図に描かれるのが文久２年（1862）である。この絵図は、徳川 14 代将軍家茂が



第７図　寛政２年絵図

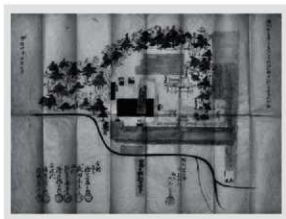


第８図　文久２年絵図



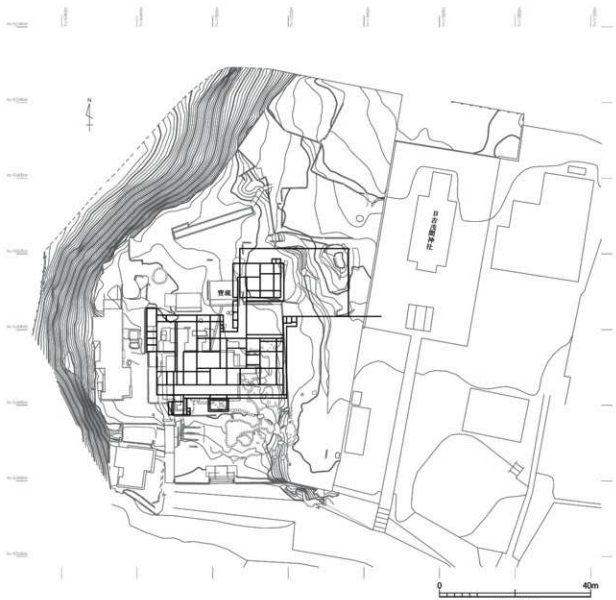
第９図　文久２年建物

上洛の際、東泉院に宿泊することとなり、事前の内見分の際に作成したものの写しと考えられる。そのため、主屋の間取りなどが詳細に描かれている（富士市教委2014）。また、六所家には明治４年に六所良色が描いた境内の絵図も残されている。恐らく文久２年に描かれた建物と同じものと考えられる。



第 10 図　明治４年絵図

参考文献
杉山一弥 2008「絵図にみる東泉院境内堂舎の変遷」『六所家総合調査だより』第３号
建部恭宣 2009「東泉院の棟札類と建築生産活動」『六所家総合調査だより』第４号



第 11 図　文久２年絵図と現況図の合成

第２節　主屋を中心とした東泉院の時期区分

前節で紹介したように、今回、発掘調査した範囲には、複数回建物が存在したことが明らかとなっており、一部では、その年代や大工の棟梁の名前・出身地すら判明している。発掘において出土した遺物の年代などから考えて３時期を設定した。建物については、以前に設定した建物①から建物④の名称を踏襲する（富士市教委2014）。

第１面【文久２年（1862）～現在】

現地表面上に現れている建物の痕跡で、明治10年に建てられ平成25年に解体された「併列六間取り型」の延べ面積約71坪の木造平屋建て住宅（石川2008）を【建物④】とする。また、文久２年（1862）には将軍家茂が宿泊するのに合わせて、土地を盛土し、現在の高さにし、【建物③】を建てていると考えられる。

第２面【寛政９年（1797）～文久元年（1861）】

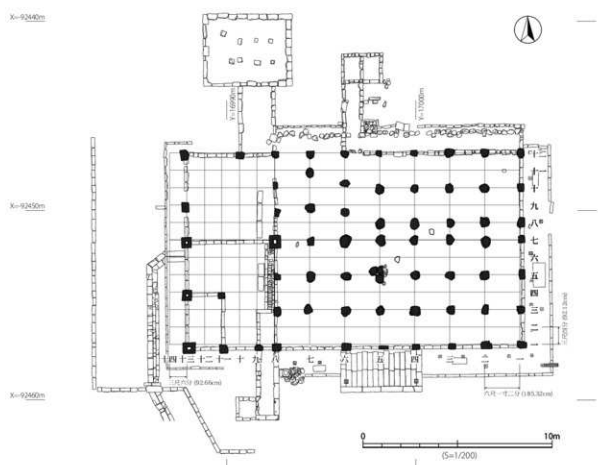
寛政９年（1797）に主屋【建物②】を再建していることが明らかとなっており、また、文久２年には土地全体を盛り土していることから、この時代を第二面として設定した。建物②は棟札より旧土肥町（現在の伊豆市）の八木沢集落の大工金剌與兵衛を棟梁として建てられたことが明らかとなっている（建部2009）。

第３面【寛政九年（1797）以前】

寛政２年（1790）主屋【建物①】が火災により焼失しており、火災後、ＳＥ２に焼けた陶磁器類などをゴミとして処理していることが明らかとなっている（富士市教委2014）。火災後に部分的に盛り土をしている箇所もあり、第２面の下層に見える生活面を第３面として設定した。ただし、第２面と明確に区分できない場所もある。

参考文献

建部恭宣2009「東泉院の棟札類と建築生産活動」『六所家総合調査だより』第４号



第12図　主屋（建物④）平面図

第３章　発掘調査成果

第１節　第１面の遺構・遺物

第１面では明治 10 年ころに建てられた建物④、同時期と考えられる門、塀、安政４年（1857）に再建された宝蔵（土蔵）、そして文久２年（1862）に建てられた建物③がある。建物④や門、塀などの実測図については、既に報告の通りである（富士市教委 2014）。

第１面のもう１つの建物「建物③」は、これまで通称「文久建物」と呼んでいたものである。文久建物は各部屋の間取りが明らかとなっており、床面積 274 坪を測る。現況図（建物④の礎石）との合成作業などから大黒柱の礎石を含めた建物西側土間部分の礎石については、その後、位置を変えることなく再利用されていると推測された。そのため、今回の調査では礎石の掘り方の検出を目指し調査を行った。

明治 10 年に建てられた建物④は東西南北軸に合う形で建築されており、建物の南東隅の番付を「一ノ一」としていることが明らかとなっている。大黒柱（八ノ七）の東側では東西 185.32cm（六尺一寸二分）、南北 92.12cm（三尺四分）の規格で設計されているが、西側では東西 92.66cm（三尺六分）の場所に礎石が認められる。このことも、大黒柱より西側の礎石は文久建物（建物③）の礎石の再利用、東側は建物④を建てる際に新たに設置された部分という考えと矛盾しない。

掘り方調査を行ったのは、建物④の番付の名称で示すと「八ノ七」「十三ノ七」「十三ノ四」「十三ノ一」の四石である。これらの石はいずれも長方形の臍穴があけられており、また大黒柱以外の礎石は、その臍穴が別の切石によって塞がれていた。これも、建物④建設時の造作と考えている。

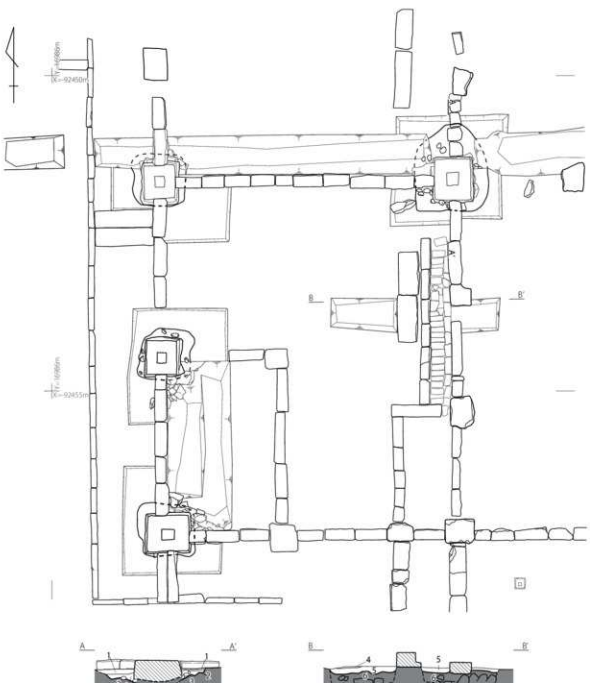
礎石「八ノ七」　上面および側面が平滑に調整された礎石で、上面では南北 65cm、東西 58cm を測る。臍穴は東西南北とも 20cm で中心座標は X=-92451.65m、Y=16992.52m である。掘り方は南北 1.45m、東西 1.16m の楕円形を呈する。深さは明らかにすることが出来なかったが、埋土は黒色土がシミ状に入る粘土を主体にしていた。

礎石「十三ノ七」　上面、側面が平滑に調整された礎石で、上面では南北 52cm、東西 50cm を測る。臍穴は東西南北とも 17cm で中心座標は X=-92451.68m、Y=16987.86m である。掘り方は南北 0.81m、東西 0.83m の隅丸方形を呈する。

礎石「十三ノ四」　上面および側面が平滑に調整された礎石で、上面では南北 53cm、東西 48cm を測る。臍穴は東西南北とも 17cm で中心座標は X=-92454.47m、Y=16987.90m である。掘り方は南北 0.81m、東西 0.83m の隅丸方形を呈する。

礎石「十三ノ一」　上面および側面が平滑に調整された礎石で、上面では南北 55cm、東西 67cm を測る。臍穴は東西 20cm、南北 17cm で中心座標は X=-92457.27m、Y=16988.00m である。掘り方は南北 0.80m、東西 0.9m の隅丸方形を呈する。

第 13 図　第１面全景（北西から）

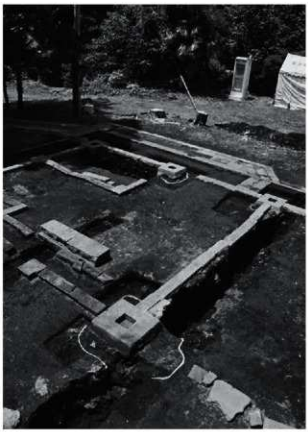


1　黒色土層(10YR2/1)　しまりなし。粘性ややあり。
2　にぶい黄色(2.5Y6/4)　しまりややあり。粘性ややあり。粘土主体の土層。黒色土がシミ状。
3　黒褐色土(10YR2/2)+　造成土(近世)大礫層上部のザルボウ等によって構成される土層。
　極暗褐色土(10R2/3)
4　にぶい黄色(2.5Y6/4)　しまりあり。粘性ややあり。粘土主体の土層。土間のタタキ。
5　黒色土(10YR2/1)　しまりややあり。粘性なし。土間の基礎となる土層。
6　黒褐色土(10R2/3)　しまりなし。粘性なし。大礫層の土(造成土)ザルボウなし。

0　1/60　2m
L=15.4m

第 14 図　礎石掘り方

第 15 図　主屋土間　検出（南から）



第 16 図　礎石　掘り方検出（北東から）

第 17 図　十三ノ一礎石　掘り方検出（南西から）

第 18 図　十三ノ四礎石　掘り方検出（北西から）

第 19 図　十三ノ七礎石　掘り方検出（南から）

第 20 図　大黒柱（八ノ七）　掘り方（北西から）

第２節　第２面の遺構・遺物

第２面は、建物②とされる通称、「寛政９年建物」の時代と考えられる。確認調査時のトレンチ調査において、第１面直下に存在する人頭大の溶岩礫層、通称「大礫層」を除去した所に面が存在することが分かっていた。「大礫層」を除去した面には、黒色土が南側を中心に面的に検出された。第２面には、建物の礎石と考えられる石が残存しており（SS601 ～ SS607）、そのうちの一部には建物の番付と推測される墨書の文字も観察された。そこから復元される建物が「寛政９年建物」と呼ぶ建物であり、礎石の番付や建物の軸を示す痕跡と直交する石列（SX603）も検出された。この建物は東西南北軸に合わせた「文久２年建物」とは異なり、36 度時計回りに回転させた向きに建っていることが明らかとなった。この向きは、あたかも富士山の眺望を意識したかのような建物配置となっているが、見つかっている絵図ではこのようには表現されていない（第７図）。しかし、これまでに検出されている寛政２年の火災に伴う片付けにより埋められたＳＥ２や周囲の溝も、検出された建物軸と一致していることから、一時期に境内にこのような建物配置の規格が存在したことは確かである（第 77 図）。

この建物の南東には池が存在したことも明らかとなった（第 33・34 図）。SK601 は安政地震により倒壊した蔵の瓦を廃棄した遺構と考えられるが、瓦が廃棄される前は、庭池として機能していたことが、断面観察から明らかとなった。

以上のような建物を建てる際の建物南側での盛土工事の痕跡は、南側に傾斜する土地に最大限に利用するための工夫と考えられる（第 27・28 図Ｇ・Ｌ断面）。

遺物は、ＳＸ 601 とされる南西ブロック周辺や、北西ブロックを中心に比較的まとまって出土している（第 53 図）。特に、北西ブロックからは灯明具が点々と出土している。これらの遺物は、大礫層を造成する前の地鎮具であった可能性も残るが詳細は明らかでない。

なおＳＸ 606 は第３面の遺構と考えているが第２面

第 21 図　作業風景（大礫層除去）

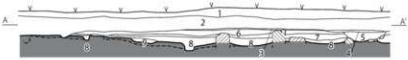
第 22 図　墨書のある礎石

第 23 図　作業風景（ＳＫ６０１）

第 24 図　ＳＫ６０１　瓦検出状況

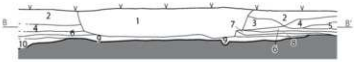
第 25 図　第 2 面　全体図（一部第 3 面合成）

南西ブロック　東西セクション南壁



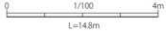
1　黒褐色土層(7.5YR2/2)　しまりなし。粘性なし。しっくい片等含む。【文久二年以降の表土】
2　暗褐色レキ層(7.5YR3/3)しまりなし。粘性なし。径5～20cm大の溶岩レキで構成される層「大レキ層」【文久二年時の造成に伴うレキ層】
3　黒色土(7.5YR2/1)　しまりなし。粘性ややあり。粘土粒子を少量含む。赤色粒子少量「黒色土」(大レキ層の下にある)【大レキ造作前の地ならし造成土】
4　暗赤色砂層(10R3/0)　しまりなし。粘性なし。ザルボウで構成される層(3層と同じ層序)
5　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまりややあり。粘性ややあり。径5～10cmの石を多量に含む。【第2面の遺構掘り込み】
6　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまりあり。粘性なし。地山溶岩粒子少量。径1～3cmの小石を少量含む。【第3面から第2面にする際の造成盛土】
7　黒褐色土(7.5YR2/2)　しまりややあり。粘性なし。径1～2cmの小石を多量に含む。粘土をシミ状に中量含む。全体的に混ざりが多い。
【時期不明造成土もしくは第3面上面】
8　黒褐色土(10YR3/1)　しまりややあり。粘性なし。地山ブロックを少量含むもののまざりが全体的に少ない。旧表土の可能性も考えられる。
しかし、30トレンチの状況からは【時期不明造成盛土】
9　黒褐色土(10YR3/2)　しまりなし。粘性なし。粘土粒子少量【８層の１種か。遺構フク土】
10　にぶい黄色(2.5Y6/4)　しまりややあり。粘性あり。黒褐色をマーブル状に含む赤色粒子(焼土粒子の可能性あり)炭化粒子を共に少量。【第3面上面の可能性あり】

南東ブロック　東西セクション南壁

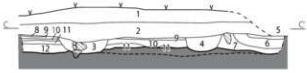


1　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまりなし。粘性なし。しっくいをシミ状に含む。下部には特に多い。粘土をシミ状に含む。下部には特に多い。瓦片多数出土。
【明治以降の改修工事に伴う掘り込み】
2　黒褐色土層(7.5YR2/2)　しまりなし。粘性なし。【文久二年以降の表土】
3　黒褐色土層(7.5YR2/2)　しまりあり。粘性なし。粘土粒子を中量含む。【文久二年の際の造成土】
4　褐灰色(7.5YR4/1)　しまりあり。粘性なし。径1～5cm大の小石を多量に含む。【文久二年の際の造成土】大レキ層に似る。
5　褐灰色(7.5YR4/1)　しまりあり。粘性なし。4層と同じ土だが小石の混ざりがない。【文久二年の造成土】
6　黒色土(7.5YR2/1)　しまりなし。粘性ややあり。粘土粒子を少量。赤色粒子少量「黒色土」(大レキ層の下にある土に対応)【大レキ造成前の地ならし造成土】
7　黒褐色砂層(7.5YR2/2)　しまりなし。粘性なし。全体的に砂っぽい土層。赤色粒子中量。【上面が第2面の可能性あり】
この層は文久二年以前の造成土。
8　黒褐色(7.5YR3/1)　しまりあり。粘性なし。地山溶岩粒子少量。径1～3cmの小石少量。【第2面上面】【第3から第2面にする際の造成土】
9　黒褐色土層(7.5YR2/2)　しまりややあり。粘性なし。径1～2cm小石多量。粘土シミ状に中量。全体的に混ざり多い。【時期不明造成土もしくは第3面上面】
10　黒色土(7.5YR2/1)　しまりなし。粘性ややあり。粘土シミ状に中量。【時期不明造成土】

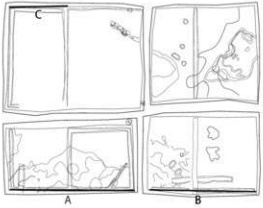
A・B Sec



北西ブロック　東西セクション北壁



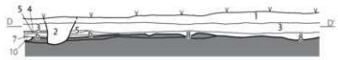
1　黒褐色土層(7.5YR2/2)　しまりなし。粘性なし。漆くい等含む。【文久二年以降の表土】
2　暗褐色礫層(7.5YR3/3)　しまりなし。粘性なし。径5～20cm丈の溶岩レキで構成される「大レキ層」【文久二年時の造成に伴うレキ層】
3　黒褐色(7.5YR3/1)　しまりなし。粘性なし。瓦片含む。【文久二年以前の掘り込みフク土】
4　黒色(7.5YR2/1)　しまりややあり。粘性ややあり。粘土粒子中量含む。径1～3cm小石含む。【文久二年以前の掘り込みフク土】
5　黒褐色(7.5YR2/2)　しまりなし。粘性ややあり。径1～3cm小石多く含む。【第二面から第一面にする際の造成土】
6　赤黒色土(2.5YR2/1)　しまりややあり。しまりなし。ザルボウを多く含み構成される。【建物外側の堆積土。雨落ち石外側の堆積土】
7　黒褐色土(5YR2/1)　しまりあり。粘性なし。土層が崩れている。水分が影響か？【建物外側の堆積土。雨落ち石外側の堆積土】
8　黒褐色土(7.5YR2/2)　しまりあり。粘性なし。粘土粒子をシミ状に含む。赤色粒子中量含む。【大レキ造成前の地ならし層】
9　淺黄粘土層(5YR7/4)　しまりややあり。しまりあり。粘土主体に、部分的に黒色土が入る。鉄化したオレンジ色粒子を中量含む。【第二面土層】
10　黒褐色土(10YR2/1)　しまりややあり。しまりなし。オレンジ色粒子を少量含む。【第三面→第二面への際の造成土】
11　黒色土(7.5YR2/1)　しまりあり。粘性なし。10層よりも少し黒い。【第三面→第二面への際の造成土】
12　極暗褐色土(7.5YR2/3)　しまりあり。粘性ややあり。粘土ブロック中量含む。炭化材、焼土を極帯状に含む多量。火災等による被熱あり。
下部の地山はガチガチに被熱を受けている。【第三面時の掘り込みフク土】



C Sec

第 26 図　調査区土層断面（１）

北西ブロック　南北セクション西壁



北西ブロック南北セクション西壁

北西ブロック　中央南北セクション西壁

1
2　黒褐色土 (7.5YR3/1)　しまりなし。粘性なし。大レキ層のレキを少量含む「大レキ層」【明治以降の掘り込み】
3　大レキ層。
4　黒褐色土 (7.5YR2/2)　しまりあり。粘性なし。粘土粒子をシミ状に少量含む。赤色粒子中量含む「大レキ造成前の地ならし層」
5　浅黄色粘土質 (5Y7/4)　しまりあり。粘性ややあり。粘土主体に部分的に黒色土が入る。鉄化したオレンジ色粒子を中量含む「第２面上面」
6　黒褐色 (10YR2/1)　しまりあり。粘性なし。オレンジ粒子少量含む。【第３面→第２面への造成盛土】
7　黒色土 (7.5YR2/1)　しまりあり。粘性なし。６層よりも少し黒い。【第３面→第２面への造成土】
8　黒褐色土 (10YR2/1)　しまりあり。粘性なし。径 1.5cm 小石を多量に含む。上部は大レキ層等により削平を受けている。【第３面上面】
9　黒褐色土 (10YR2/1)　しまりあり。粘性なし。粘土粒子を少量シミ状に含む。焼土粒子を中量含む。【第３面上面】
10　橄欖褐色土 (7.5YR2/3)　しまりあり。粘性ややあり。粘土ブロックを中量含む。炭化材焼土を零状に極多量に含む。【第３面時の掘り込みフク土】
　　火災もしくはカマド風呂場等による被熱を受けている。また下部の地山もガチガチに被熱を受けている。

北西ブロック南北セクション西壁

1　黒褐色粘土質 (7.5YR3/1) しまりあり。粘性なし。粘土をシミ状に部分的に含む。【SX602を構成する土層】
2　明黄褐色土質 (10YR6/6) しまりあり。粘性なし。粘土のみで構成される。混ざりほとんどなし。
3　黒褐色土層 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性ややあり。径3cm程度の小石を少量含む。【遺構内フク土】

北西ブロック　中央南北セクション西壁

北西ブロック南北トレンチ西壁

北西ブロック　南北トレンチ西壁

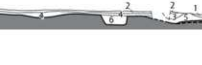
1　黒褐色土 (7.5YR2/2)　しまりなし。粘性ややあり。径１～３cm 小石を多く含む。　【第２面から第１面にする際の造成土】
2　黒褐色土 (7.5YR3/2)　しまりやや有り。粘性ややあり。径 0.5 ～ 1cm の小石を多く含む。　【第２面から第１面にする際の造成土もしくは第３～第２面の造成土】
3　赤褐色土 (2.5YR2/1)　しまりやや有り。粘性なし。ザルボウを多く含み構成される。【建物外側の堆積土，雨落ち石外側の堆積土】
4　黒褐色土 (5YR2/1)　しまりあり。粘性なし。上面が硬化している。水分の影響か？【建物外側の堆積土，雨落ち石外側の堆積土】
5　黒褐色土 (5YR2/2)　しまりなし。粘性なし。赤色粒子を少量含む。　【第３面→第２面の造成土】

北西ブロック南北トレンチ西壁

1　橄欖赤褐色土 (5YR2/4) しまりなし。粘性なし。ザルボウで構成される土層。焼土粒子多量。【SX601】
2　黒褐色土 (7.5YR3/1)　しまりやや有り。粘性ややあり。焼土粒子少量含む。【SX602】
3　黒色 (7.5YR2/1)　しまりやや有り。粘性なし。径１～３cm 小石を含む。【第２面上面】
4　黒褐色 (10YR3/1)　しまりなし。粘性ややあり。まぢり少ない。赤色粒子少量。【第３面から第２面にする際の造成盛土】
5　黒色 (7.5YR2/1)　しまりなし。粘性なし。径５cm 程度の小石を多く含む。【第３面以前の遺構覆土】

北東ブロック　南北トレンチ西壁

北西ブロック　南北トレンチ西壁



北東ブロック　南北トレンチ西壁

1　黒褐色(7.5YR2/1)　しまりなし。粘性なし。粘土粒子中量。
2　黒褐色(7.5YR2/2)　しまりなし。粘性なし。溶岩レキ、径1～3cm小石多量。
3　黒色土(7.5YR2/1)　しまりあり。粘性なし。径1～3cm小石少量。
　　【第2面＝第3面上面、造成土】
4　黒褐色(7.5YR3/1)　しまりあり。粘性なし。地山溶岩粒子少量。【第2面＝第3面上面】

南西ブロック　南北トレンチ西壁

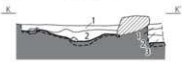
1　黒褐色土層 (7.5YR3/1) しまりなし。粘性なし。しっくい粘土をシミ状に含む。
　　【明治以降の工事に伴う掘り込み】
2　黒色土 (7.5YR2/1)　しまりやや有り。粘性なし。粘土粒子少量。赤色粒子少量
　　「黒色土」（大レキ層の下にある土）【大レキ造成前の地ならし造成土】
3　暗灰色 (7.5YR4/1)　しまりあり。粘性なし。径１～３cm 小石多量（掘り込み？）
4　黒褐色 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性なし。地山溶岩粒子少量。径１～３cm の
　　小石少量。この土の上面が第２面上面【第３→第２面の際の造成土】
5　黒褐色土層 (7.5YR2/2) しまりやや有り。粘性なし。径１～２cm 小石多量。
　　粘土シミ状中量。混ざり多い。【第２面上面、時期不明造成土】
6　黒色 (9.5YR2/1)　しまりやや有り。粘性なし。地山粒子中量。
　　【第３面遺構フク土】

0　1/100　4m
L=14.8m

第 27 図　調査区土層断面（２）

南西ブロック　29Tr　南北セクション西壁

南西ブロック　北東ー南西セクション



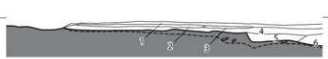
南西ブロック　29Tr　南北セクション西壁

1　褐灰色粘土層(7.5YR4/1)　しまりあり。粘性あり。粘土をスジ状に多量に含む。【SX602　タタキ】
2　褐灰色粘土層(7.5YR4/1)　しまりあり。粘性あり。粘土をブロック状に含む。下部は炭化材を少量含む【寛政9年の造成土か】
3　黒褐色土層(7.5YR3/1)　しまりなし。粘性なし。炭化材を極多量。焼土(赤色)を多量。
【寛政２年主屋焼失時のピットフフクドもしくは建物外側の落ちこみに火災の炭化材等を片づけたものか】

南西ブロック　北東ー南西セクション

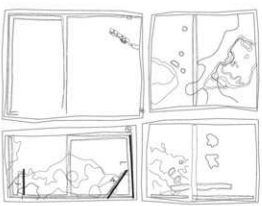
1　黒褐色土 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性なし。地山溶岩粒子少量。径１～３cm の小石少量含む【第３面から第２面にする際の造成盛土】
2　黒褐色土 (7.5YR2/2)　しまりややあり。粘性なし。径１～２cm の小石を多量。粘土をシミ状に中量。全体的に混ざりが多い。
【時期不明造成土もしくは第３面上面】
3　黒褐色土 (10YR3/1)　しまりややあり。粘性なし。地山ブロックを少量含むものの、全体的に混ざりが少ない。旧表土の可能性も考えられるか
【時期不明造成盛土】

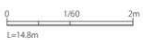
南西ブロック　南北トレンチ東壁



南西ブロック　南北トレンチ東壁

1　黒色土 (7.5YR2/1)　しまりなし。粘性ややあり。粘土粒子を少量含む。赤色粒子少量「黒色土」(大レキ層の下にある。)
大レキ層造作前の地ならし。
2　黒褐色土 (7.5YR3/1)　しまりなし。粘性なし。粘土粒子を中量含む。【この上面が第２面】(寛政９年)
3　浅黄色土 (2.5Y7/4)　しまりあり。粘性なし。粘土を主体とする層。２層がシミ状に入る。２層同様。上面が第２面。(寛政９年)
4　黒褐色土 (7.5YR3/1)　しまりあり。粘性なし。地山の溶岩粒子少量。径１～３cm の小石を少量含む。(第３面から第２面にする際の盛土)
5　黒褐色土 (7.5YR2/2)　しまりなし。粘性ややあり。径２～５mm の溶岩粒子を中量含む。粘土粒子をシミ状に含む。(第３面の凍構フクセ土)
6　にぶい黄色 (2.5Y6/4)　しまりややあり。粘性あり。黒褐色をマーブル状に含む。赤色粒子(焼土粒子の可能性あり。)炭化粒子を共に少量含む。
【第３面上面の可能性あり】





第 28 図　調査区土層断面（3）

に所属する可能性もあるため、全体図は合成している。

ＳＳ６０１

礫層除去後にＸ＝-92457.0m、Ｙ＝16996.0m付近において検出。50cm×45cmの方形の川原石で上面は比較的平らに調整されている。中央には建築時の墨付けのラインに加え、「四ノ十二」の番付が認められる。

ＳＳ６０２

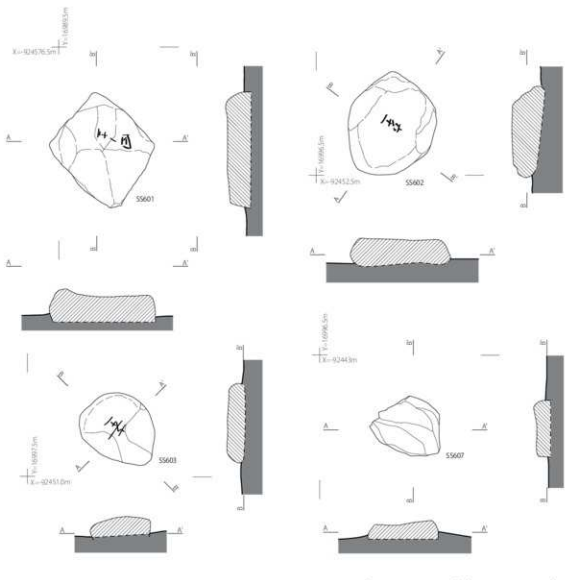
礫層除去後にＸ＝-92452.2m、Ｙ＝16996.9m付近において検出。53cm×47cmの円形の川原石で上面は比較的平らに調整されている。中央には建築時の墨付けの十字のラインが残存する。十字の中心座標は、Ｘ＝-92452.266m、Ｙ＝16996.889mである。また、十字の脇に墨付けの番付が確認され、「六ノ十一」と判読できる。

ＳＳ６０３

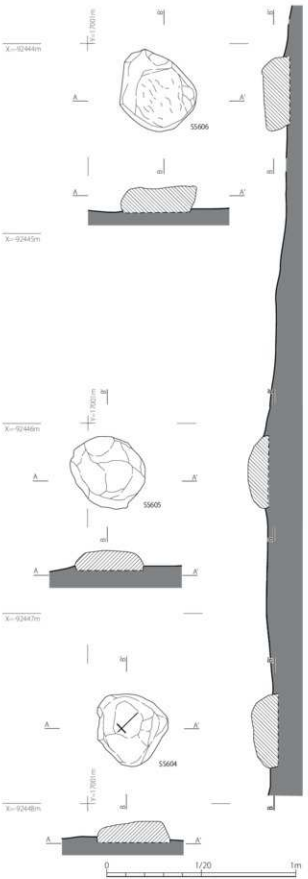
礫層除去後にＸ＝-92450.8m、Ｙ＝16998.0m付近の土層観察用ベルトの下において検出。42cm×32cmの円形の川原石で上面は比較的平らに調整されている。中央には建築時の墨付けの十字のラインが残存する。十字の中心座標は、Ｘ＝-92450.766m、Ｙ＝16997.949mである。また、十字の脇に番付が確認され、「七ノ十一」と判読できる。「六ノ十一」と判読されたＳＳ６０２の十字交差部分との直線距離は1.837m（約6尺6分）である。

ＳＳ６０４

礫層除去後にＸ＝-92447.6m、Ｙ＝17001.2m付近



第29図　ＳＳ６０１・ＳＳ６０２・ＳＳ６０３・ＳＳ６０７



第30図　SS604・SS605・SS606

第31図　SS601検出状況

第32図　SS604～SS606検出状況

において検出。37cm × 39cm の円形の川原石で上面は比較的平らに調整されている。中央には建築時の墨付けの十字のラインが残存する。十字の中心座標は、X＝-92447.60m、Y＝17001.18m である。

SS605

礫層除去後に X＝-92446.2.m、Y＝17001.1m 付近において検出。36cm × 37cm の円形の川原石で上面はあまり平らには調整されていない。

SS606

礫層除去後に X＝-92444.3m、Y＝17001.4m 付近において検出。40cm × 42cm の円形の川原石で上面の広い範囲が平らに調整されている。

SS607

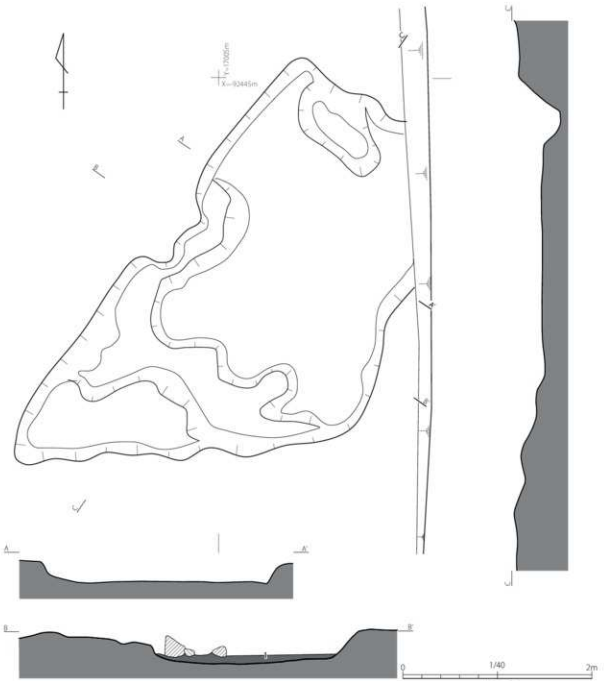
礫層除去後に X＝-92443.4m、Y＝16997.0m 付近において検出。30cm × 37cm の円形の川原石で上面は比較的平らに調整されている。

SK601

遺構

北東ブロックにおいて検出された。掘り込みは長方形を呈し、南側の短辺部分が三角形に尖った形状を呈する。全面に瓦の破片が検出されたことから、瓦廃棄土坑と考

第 33 図　SK601　遺物検出状況



1　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　しまりあり。粘性なし。黒に赤色（鉄分か）のシミを含む。

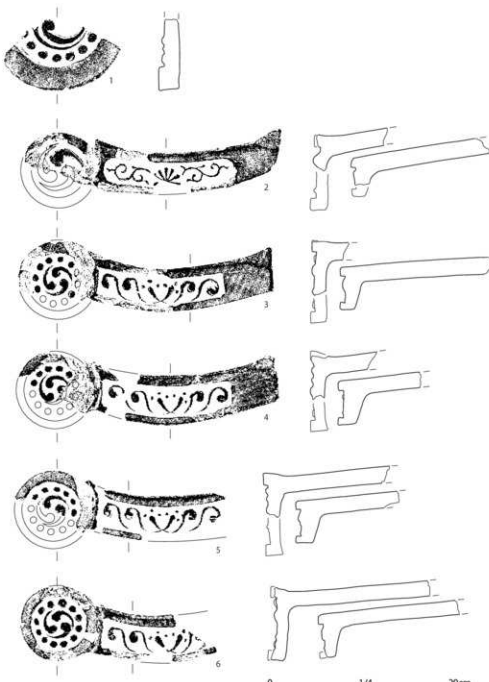
第34図　ＳＫ６０１

第35図　ＳＫ６０１　遺物検出状況（南東から）

第36図　ＳＫ６０１完掘（南西から）

えられる。深さ 30cm 程度の掘り込みのうち 20cm 程度の深さに瓦が認められ、瓦と地山との間には、にぶい黄橙色の粘土が底面に厚さ 10cm 認められた。瓦を廃棄するために粘土を埋めたのではなく、この掘り込みが庭の池として機能していた際に水が染み込むのを防ぐための造作と考えられる。長軸の角度も、復元される建物の軸に並行することから建物に付随する庭の池としての掘りこみと考えられる。その後、池としての機能を停止させ、瓦を廃棄したと推測される。

瓦については後述するが 18 世紀後半に製作された瓦で、しかも蔵の瓦であることから安政の大地震で崩壊した蔵の瓦であった可能性がある。1782 年から 1791 年に第 15 代住持隆尊により庫裏・米蔵が再建されたとの記録も残ることから、それに伴う蔵に使用された瓦である可能性もある。



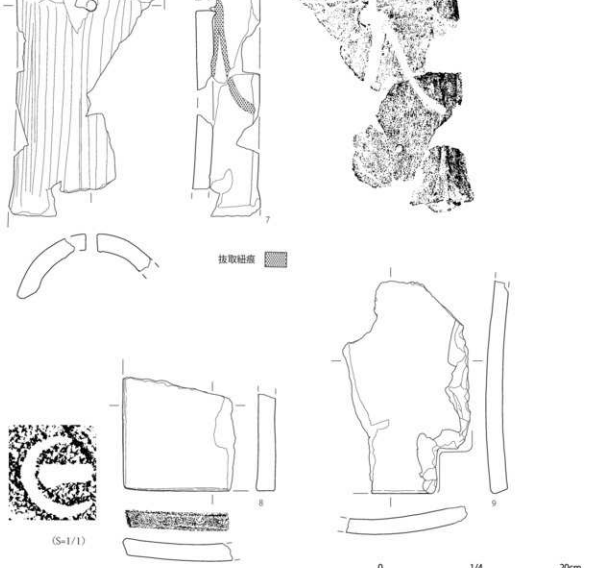
第 37 図　ＳＫ６０１出土遺物（1）

出土遺物

コンテナ約 40 箱分の瓦が出土している瓦以外の陶磁器片も数点出土している。以下、全体の形状や法量などが分かるなど特徴的なものを抽出して報告する。

1は軒丸瓦の瓦当部で瓦当径 14.6cm に復元される。連珠三巴紋で珠紋数は 16 個と推測される。三巴紋の尾から頭の方向で見ると右巻きである。

2～6は軒桟瓦である。2は3～6と文様が異なり修理の際に使用された瓦と考えられ、軒桟瓦2類とする。軒平部中心飾りが半菊紋で左右の唐草は写実的である。軒丸部には左巻きの三巴紋が存在する。3～6は文様構成を同じくする軒桟瓦1類と分類できるものである。軒丸部が左巻きの連珠三巴紋で珠紋数は 12 に復元されるが、6は3～5に比べて珠紋が大きい。これを軒桟瓦1b類とし、3～5のように小さいものを軒桟瓦1a類とすると、SK601から出土した瓦では、軒桟瓦1a類（3～5）は 19 点、軒桟瓦1b類（6）は 10 点、細分できない軒桟瓦1類が 21 点を数える。ちなみに軒桟瓦



第 38 図　SK601出土遺物（2）

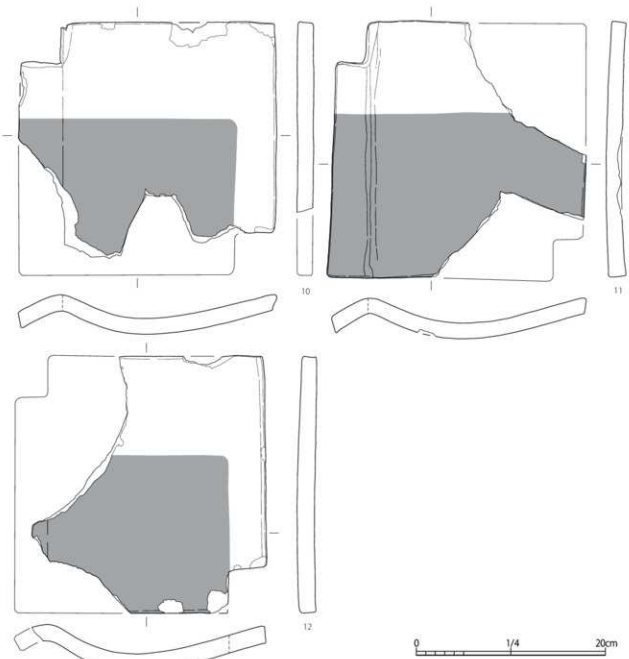
2類（2）は図化した1点のみである。

7は瓦当面が欠損しているが軒丸瓦と考えられる。内面には抜取り紐の痕跡が確認できる。8・9は平瓦もしくは桟瓦の破片である。8は小口に「丸に「一」」の刻印が観察される。

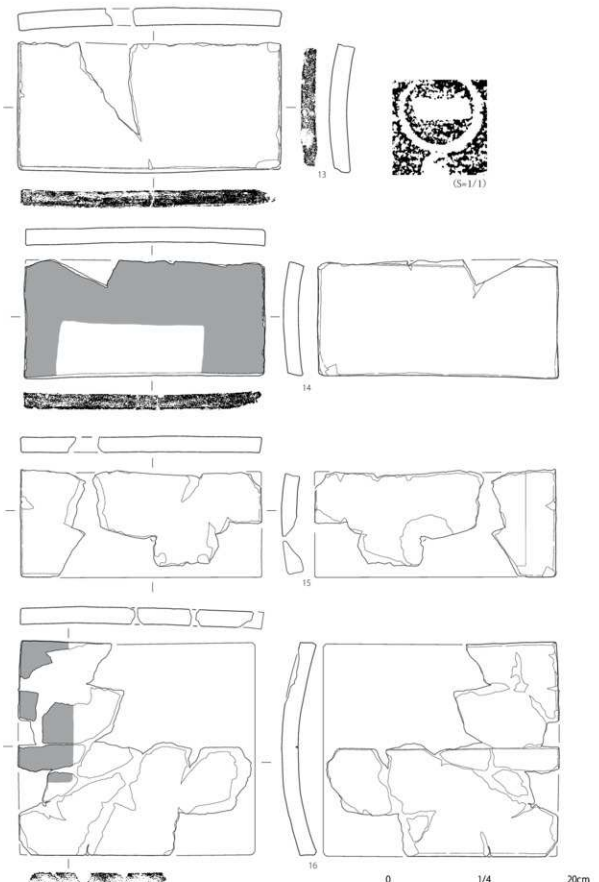
10～12はいずれも桟瓦で全体の形状が復元できる。狭部切り込み側の幅と平部切り込み幅は22.8cm、桟部切込み長は4.2cm、幅3.2cm～4.2cm、平部弧深凸面は2.2cm～2.4cm、凹面は1.8cmを測る。使用痕が比較的明瞭に観察される。

13～16は、いずれも熨斗瓦である。側面のうち外側から見える部分には文様は確認できない。13の小口には、「丸に「一」」の刻印が観察される。表面には分割線がある。14、16には裏面に分割線が存在し、15には穿孔らしきものが観察され、釘穴の可能性がある。いずれも焼成後の分割である。

17は棟瓦のうち伏間瓦とされるもので、背が山形になっている。



第39図　SK601出土遺物（3）



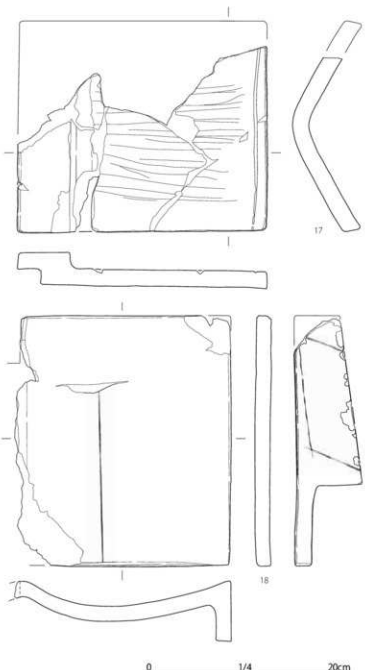
第40図　ＳＫ６０１出土遺物（４）

18～20は、袖桟瓦で表面、袖部外面に朱線が認められる。20は焼成後の穿孔が認められ、小口には「丸に「二」カ」と思われる刻印が認められる。

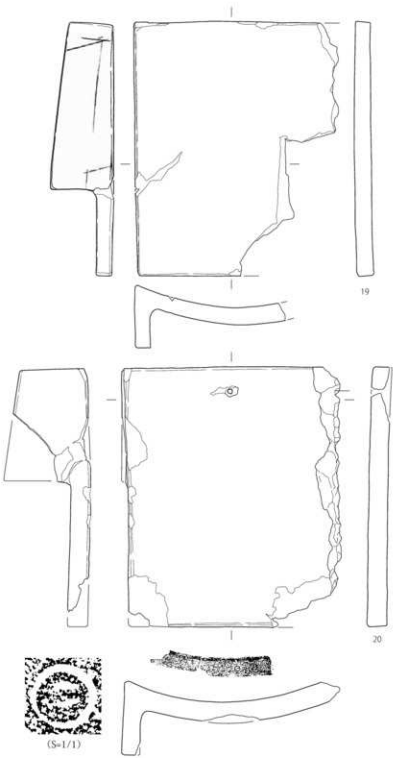
21は海鼠瓦である。ほぼ正方形を呈し、角から10cm × 10cm程度内側に釘穴を有する。表面は丁寧に磨かれ、辺から1.2cm～2.2cmの箇所に漆喰の範囲を規定すると思われる右上がりの線が認められる。

22、23、24ともに詳細不明の瓦であるが、24は鬼瓦の可能性が高い。

25は18世紀末から19世紀前半に景徳鎮窯で生産された碗で、二次的な被熱が認められる。28は肥前の京焼風陶器の鉢で17世紀末から18世紀初頭に作られたと考えられる。

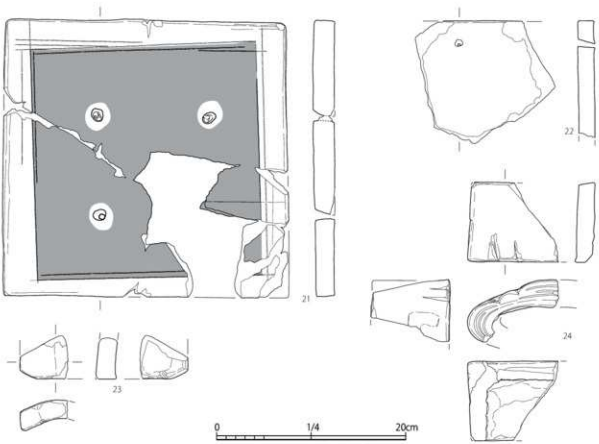


第41図　ＳＫ６０１出土遺物（５）

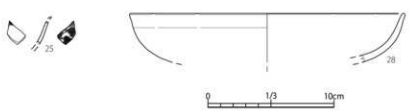


0 1/4 20cm

第42図　ＳＫ６０１出土遺物（６）



第 43 図　ＳＫ６０１出土遺物（７）



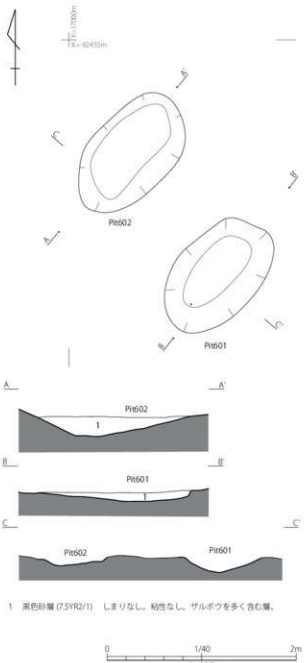
第 44 図　ＳＫ６０１出土遺物（８）

第１表　ＳＫ６０１出土瓦組成

種別	接合状態	点数（点）	重量（g）
軒丸瓦	非二次	2	1,127
軒桟瓦	非二次	35	13,242
軒平・軒桟瓦	非二次	28	5,500
丸瓦	非二次	2	370
桟瓦	非二次	1,460	215,097
平・桟瓦	非二次	2,144	204,540
熨斗瓦	非二次	56	16,586
熨斗瓦？	非二次	27	1,626
伏間瓦	非二次	3	2,015
鬼瓦？	非二次	1	211
袖桟瓦（右）	非二次	10	6,272
袖桟瓦（左）	非二次	16	10,440
袖桟瓦？	非二次	12	720
海鼠瓦	非二次	8	6,866
海鼠瓦？	非二次	5	271
不明	非二次	30	2,093
合計		3,839	486,976

Pit６０１・６０２

南東ブロックにおいて検出。二つとも形態的に似た楕円形を呈する。ＳＸ６０２の粘土の広がりを切るように検出した。Pit601 は 68cm × 44cm、深さ 18cm を測る。Pit602 は 72cm × 42cm、深さ 22cm を測る。両者とも長軸が、第２面において確認された建物跡の軸と並行することからそれらの建物に関係する掘りこみの可能性が考えられる。遺物は認められない。



第 45 図　Pit ６０１・Pit ６０２

ＳＸ６０１

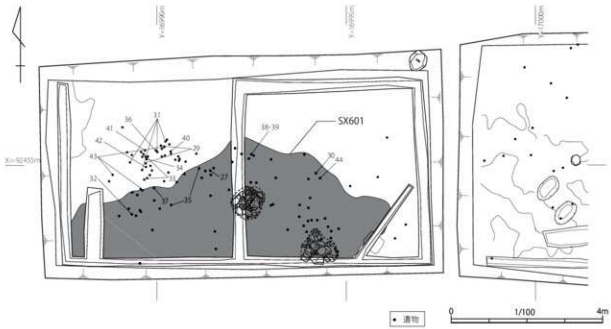
遺構

南西ブロックにおいて礫層を除去した後、粘土、漆喰を含む土層が認められ、特に南端では焼土のまとまりが認められたため、焼土を含む粘土の範囲を遺構として捉えた。範囲の中から遺物が比較的多く出土しているが性格は明らかではない。後述するＳＸ６０２の上面において認識されたことから、両者は同一の性格を有する可能性がある。なお、29 トレンチの断面の観察では、地山が南側に向かって低く傾斜しており、そこに大量の炭化材が認められた（第 28 図 J 断面）。ＳＸ６０１の土層はこれらの炭化材を含む土層と直接的関係がないことから、29 トレンチの炭化材とＳＸ６０１の焼土形成との関係性は現段階では見出せない。

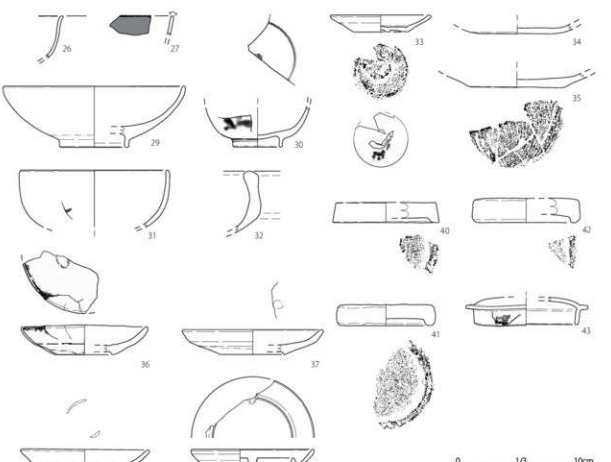
出土遺物

26 は中国からの輸入された磁器で徳化窯で生産された端反形の碗で、19 世紀の生産と考えられる。口縁部に釉剥ぎが認められる。27 は肥前の青磁碗で口銹が認められる。17 世紀末から 18 世紀初頭と考えられる。29 は肥前の京焼風陶器の碗で、18 世紀中葉と考えられる。30 は 19 世紀前半の瀬戸・美濃の碗、31 は京都・信楽の半球形の碗で 18 世紀前半。32 は江戸在地で生産されたと考えられる焙烙の破片である。18 世紀前半と考えられる。33 から 35 はかわらけである。33 は胎土や器壁の薄い作りなどが 34・35 と異なり、江戸在地での生産と考えられる。見込みの縁を窪ませている。34・35 は駿河周辺で造られたと考えられるかわらけである。いずれも年代は不明。36 から 38 は瀬戸・美濃の灯明皿、39 は瀬戸・美濃の油受け皿である。36・37 はいずれも 18 世紀前半ものと考えられる。38・39 は 19 世紀前葉から中葉。40 から 42 は塩壺の蓋である。40 はこれまでに東泉院で出土しているものと異なり、上面が平らに丁寧に整形され、屈曲部もシャープに仕上げられている。41・42 はこれまでにも東泉院で出土している塩壺の蓋に形状が似ており、整形が比較的荒い。41・42 を 18 世紀前半と位置づけ、40 を一段階古くし 17 世紀末から 18 世紀前葉としておく。43 は京都・信楽の土瓶の蓋で、18 世紀後半から 19 世紀中葉の時間幅で捉えられる。

44 は海鼠瓦の破片である。全体の形状は不明。角から 9.2cm × 8.8cm 程度内側に釘穴を有する。表面は丁



第 46 図　ＳＸ６０１周辺遺物出土状況



第 47 図　ＳＸ６０１出土遺物（１）

率に磨かれ、各辺に漆喰の範囲を規定すると思われる線が認められるが、各辺とも幅は一致しない。

45は寛永通宝の破片である。直径3.1cm程度に復元される。

ＳＸ６０２

遺構

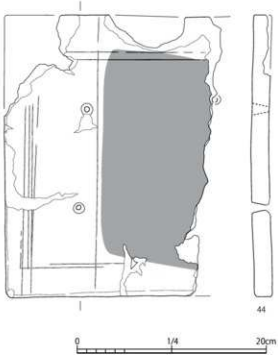
南東ブロック、南西ブロックにおいて検出された。南西ブロックの西端において、ＳＸ６０１の除去後、砂質粘土に黒色土が混ざるものの同一レベルで南東ブロックまで粘土の広がりが確認されたため、砂を建物の土間部分のタタキの残存ではないかと考えそれらを含めてＳＸ６０２とした。ＳＸ６０２の上面にはあまり遺物は認められないもののその周囲から比較的多くの陶磁器破片が出土している。一部はＳＸ６０１出土の遺物として扱われている可能性が高い。

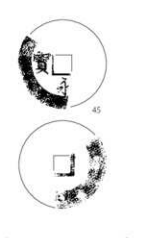
遺物

46は刀子、47・48は鉄釘と考えられる。

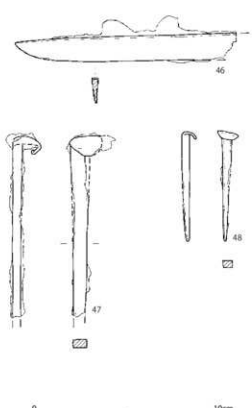
ＳＸ６０３

北西ブロックにおいて、第３面を目指して掘削している途中で検出された石列である。時期は第２面の建物に付随するものと考えられる。北側に面を持たせた溶岩を５石長さ1.84ｍ配置している。石列の内側（南側）は外側（北側）と比べて地山の高さが高いことから外側部分は、石列に沿って人為的に掘り窪められたと考えられる。第２面において検出された建物の軸にも一致するこ





第48図　ＳＸ６０１出土遺物（２）



第49図　ＳＸ６０２出土遺物

とから、これらの石列は建物の縁を示すもので外側部分は雨落ち状の性格をもつと考えられる。この石列は、地山である溶岩の高まりにそのまま接続しており、この溶岩の高まりが建物の設計におおきな影響を与えていると推測される。

ＳＸ６０４

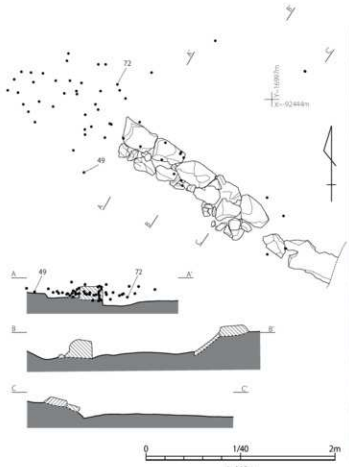
ＳＸ６０２上面において集石状のまとまりとして検出した。直径 80 ～ 90cm 程度の範囲に溶岩が認められ、一見建物の根石（基礎）構造と考えることも出来るが、全体的に上部からの力に対して安定感がなく石の大きさもバラバラである。中央に大きめの石が斜めに存在し、南側には板状の石が立って存在することが観察された。掘り込みのようなものを認識することができるが、明確ではない。ＳＸ６０５も同様の様相を呈するが、ＳＸ６０４の方がより石が細かく、石の使い方も異なる。性格は判然としない。

ＳＸ６０５

ＳＸ６０４の南西にて検出。ＳＸ６０４同様、直径 80 ～ 90cm 程度の範囲に集石状のまとまりとして認識した。断ち割ったものの掘りこみは認識できず、近世造成盛土上に存在する。ＳＸ６０４・ＳＸ６０５は第２面において認識される建物の軸線上に存在するため、建物に関係する遺構と想定されるものの明確な位置づけが出来ない。

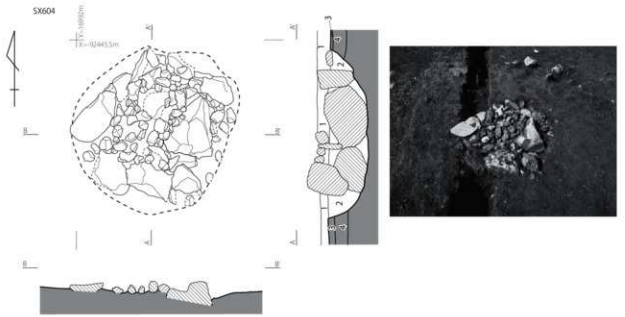
第２面において出土した遺物

49・50 は中国から輸入された磁器である。49 は 17 世紀前半の景徳鎮窯の白磁碗で、表面に陽刻文が認められる。50 は徳化窯の端反の白磁碗である。口縁部に釉剥ぎが認められる。18 世紀末から 19 世紀前葉と考えられる。51･52 は京都・信楽の碗で灰釉が施されている。いずれも 18 世紀中葉と考えられる。53 から 55 は瀬戸・美濃の碗である。53 は腰錆碗で灰釉と鉄釉の掛け分け



第 50 図　ＳＸ６０３

第 51 図　ＳＸ６０３（北西から）



SX604
1　明赤色砂層 (10YR3/6)　しまりなし。粘性なし。ザルボウで構成される層。大礫層造成前の地ならし造成土
2　黒色土層 (7.5YR2/1)　しまりなし。粘性なし。しまりなど全くなく石とその間に入り込んだ土。
3　黒褐色土 (7.5YR2/1)　しまりややあり。粘性なし。径1～2cmの小石を多量に含む。
　　粘土をシミ状に中量、全体的に混じり多い。　【時期不明造成土】
4　黒褐色土 (10YR3/1)　しまりあり。粘性あり。地山ブロック少量含む。ものの混じり少ない。
　　【時期不明造成土】

第52図　ＳＸ６０４・ＳＸ６０５

が認められる。17 世紀末から 18 世紀初頭の生産である。55 は天目形の碗で 17 世紀前半、54 は 19 世紀中葉の湯呑み碗である。

56 から 67 はいずれも肥前の碗である。56 は京焼風陶器で山水文の呉須絵が認められる。底部には「清水」の刻印がある。17 世紀末から 18 世紀初頭と考えられる。57 は半球形の碗で 17 世紀末、58 は 17 世紀後半である。59 は 17 世青磁染付けの碗で見込みにコンニャク印判がある。59 から 61 はいずれも 17 世紀末から 18 世紀初頭と考えられる。62・63・65 は同一種の端反碗で 19 世紀前葉から中葉。66 は 19 世紀中葉の湯呑碗、67 は 17 世紀末の白磁のうがい茶碗である。

68 は中国景徳鎮窯の皿と考えられる。外面に陽刻文が認められる。明末の 16 世紀前葉から 17 世紀の生産と考えられる。

69 から 72 は肥前の皿である。72 は 17 世紀前半の初期伊万里の白磁の輪花碗で、畳付砂が付着している。69 が 17 世紀末から 18 世紀前葉,71 も 18 世紀前葉で、70 は 19 世紀前葉から中葉。

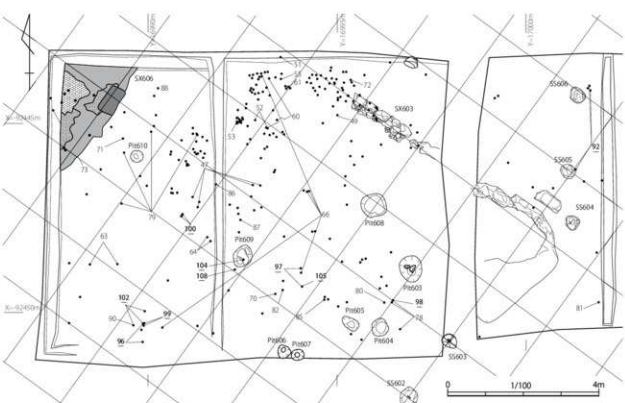
74 は中国景徳鎮窯の鉢で二次的な被熱が認められる。清朝の 17 世紀後半から 18 世紀前半のものと考えられる。

75 の磨きかわらけは年代、生産地共に不明。76 は肥前、77 は京都・信楽の猪口で、それぞれ 18 世紀末から 19 世紀前半、17 世紀末から 18 世紀初頭の生産である。77 は見込みに赤色の物質が付着しているが、原料は特定していない。二次的な被熱が認められる。

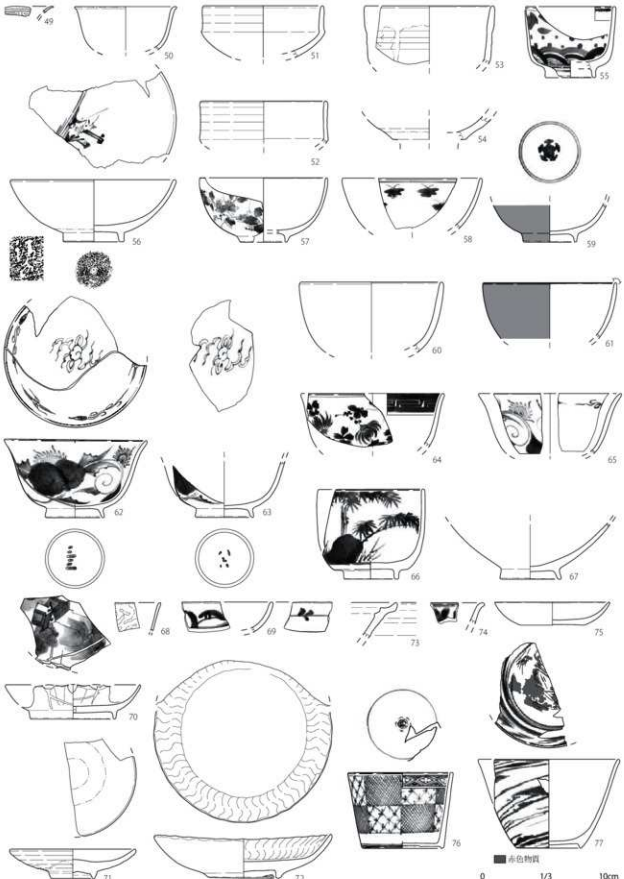
78 は肥前の鶴首形をした御神酒徳利で 19 世紀前葉から中葉、79 は京都・信楽の急須で 19 世紀から近代の生産である。白泥の下地に灰釉を施釉している。80 は肥前の合子で 17 世紀末から 18 世紀前葉と考えられる。

82 は瀬戸・美濃の植木鉢で 19 世紀中葉、83・84 は同一種の可能性が考えられる肥前の植木鉢である。赤、金の上絵が認められ、質の高い製品といえる。19 世紀前葉から中葉の生産である。

85 は人形だが、なにを表現しているのか不明。前後型あわせで中空である。86 は備前の壺蓋で 19 世紀中葉、87 は瀬戸・美濃の鍋で 19 世紀前葉から中葉と考えら



第 53 図　第 2 面　北西ブロック遺物出土状況



第 54 図　第 2 面出土遺物（1）

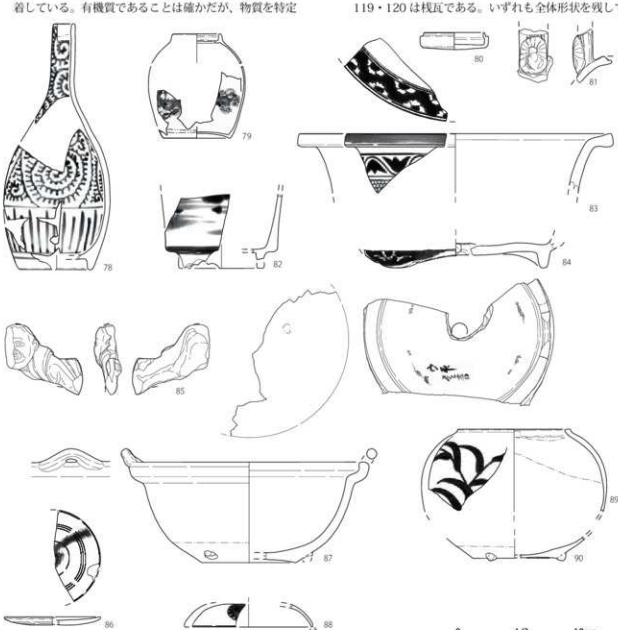
れる。88 は 17 世紀後半の碗蓋。89 は京都の土瓶で銹絵が認められる。18 世紀後半のものである。非常に似たものが SE02 から出土している（報告書 174）。

91・92 は瀬戸・美濃の灯明皿で 17 世紀末から 18 世紀前半のものである。91 は鉄釉、92 は灰釉で紐状把手が付く。一方、93 ～ 95 は同時代の備前の灯明皿、油受け皿である。回転糸切りが見られ、93 には二次的な被熱が認められる。

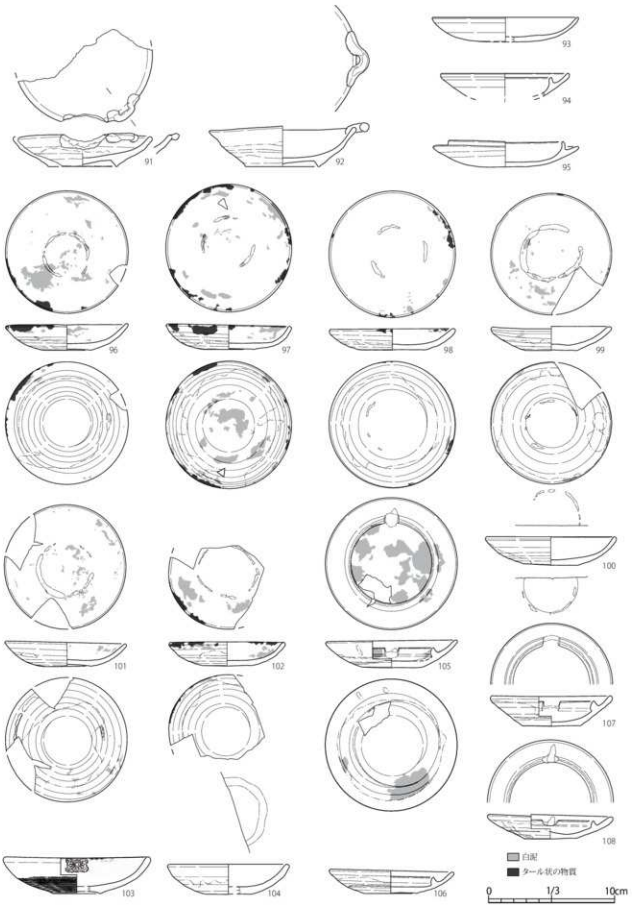
96～108 は 19 世紀前葉から中葉（一部、後半）の瀬戸・美濃の灯明皿、油受け皿である。口唇部を中心にタール状の物質が付着している。また、白泥のような物質も付着している。有機質であることは確かだが、物質を特定するにはいたらなかった（第 3 章第 3 節）。

109 ～ 122 は瓦である。109 は軒平もしくは軒桟瓦で東海式の文様で構成されている。110 は輪違瓦、112・113 は熨斗瓦である。112 の小口には「カギに「正」」の刻印が認められ、113 には刻線、朱線が観察される。115 は海鼠瓦で、角から 7.2cm × 7.2cm 程度内側に釘穴を有する。表面は丁寧に磨かれ、辺から 2.0cm ～ 2.2cm の箇所に漆喰の範囲を規定すると思われる刻線が認められる。114 も海鼠瓦の可能性がある。116 は塀瓦、117 は板桟瓦などの可能性も考えられるが、小破片のため明らかではない。

119・120 は桟瓦である。いずれも全体形状を残して



第 55 図　第 2 面出土遺物（2）

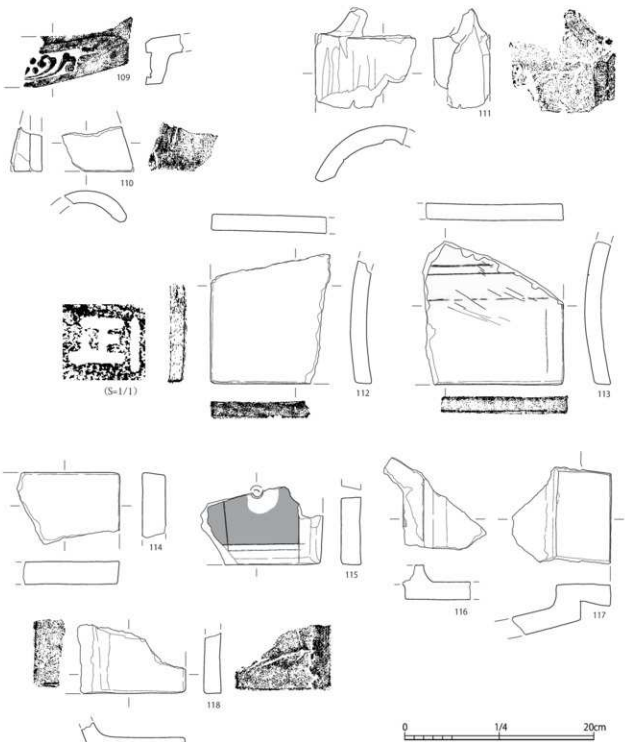


第 56 図　第 2 面出土遺物（3）

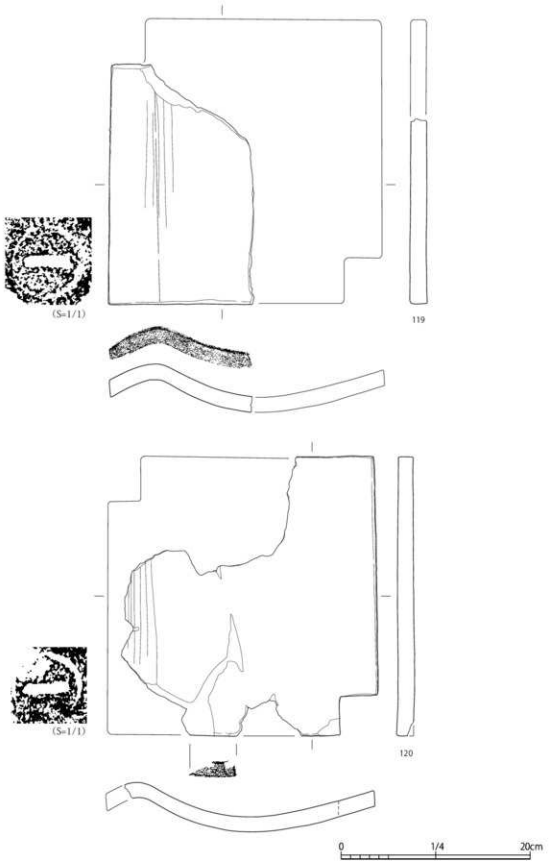
いない破片だが、同一種として復元し図化した。狭部切り込み側の幅と平部切り込み幅は 24.8cm、桟部切込み長は 3.3cm、幅 3.3cm、平部弧深凸面は 3.3cm、凹面は 1.9cm を測る。いずれも小口に「丸に「一」」の刻印が認められる。121・122 は谷桟瓦である。桟部に漆喰の付着が認められる。

123 は建具の部材と考えられる。

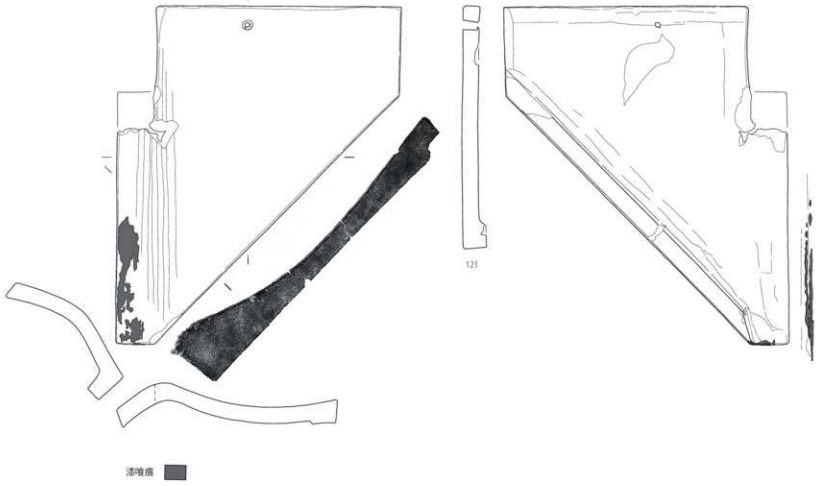
124 ～ 131 は銭貨で以下 8 点が本発掘調査で出土したすべてである。124 は北宋の生産された「祥符元宝」（1008 年初鋳）、125 も北宋の生産された「元符通宝」（1098 年初鋳）である。126 から 131 は「寛永通宝」であるがバラエティに富んでいる。



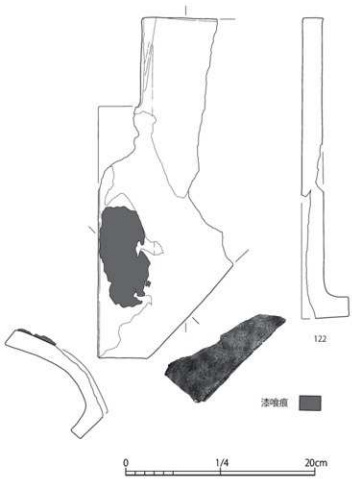
第 57 図　第 2 面出土遺物（4）



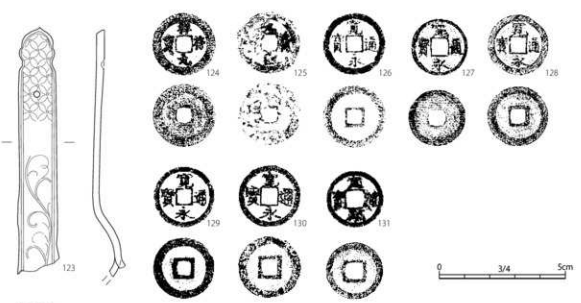
第58図　第2面出土遺物（5）



第 59 図　第 2 面出土遺物（6）



第 60 図　第 2 面出土遺物（7）



第 61 図　第 2 面出土遺物（8）

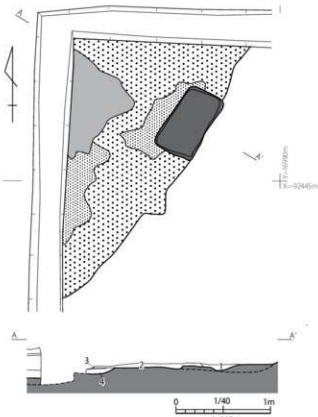
第３節　第３面の遺構・遺物

「寛政二年（1790）主屋」【建物①】が火災により焼失しており、火災後、ＳＥ02に焼けた陶磁器類などをゴミとして処理していることが明らかとなっている（富士市教委2014）。火災後に部分的に盛り土をしている箇所もあり、第２面の黒色土を除去した下層に見える面を第３面として設定している。ただし、地山面の部分もあり、第２面と明確に区分できない場所もある。そのため、ＳＸ606も「寛政９年建物」【建物②】に伴う可能性も残る。

ＳＸ６０６

北西ブロック北西隅において粘土の広がりが確認された。粘土は調査区外にも広がるものと考えられるが、現状は三角形の範囲に認められる。粘土は地山（基盤層）の上に直接貼り付けられている。粘土の認められるプランは第２面において確認された建物軸と並行することから同一建物の可能性もあるが、粘土面と第２面と認識した層には間層（造成土か）があるため、前段階の建物の痕跡と考えている。

検出した粘土は建物の土間部分と考えられ、さらに焼土や炭化材が集中する部分の地山が赤化している部分もある。これが火災によるものなのか、土間部分に存在した台所や風呂場などの日常的な作業により生じたものなのかは明らかではない。仮に火災であるならば寛政２年に起きたとされる火災の可能性が指摘される。一方、粘土部分に30cm × 70cmの長方形の範囲に焼土がまったく存在せず黒色土が堆積している部分が存在するが、これは土間から建物部分に入るための式台の石が設置さ

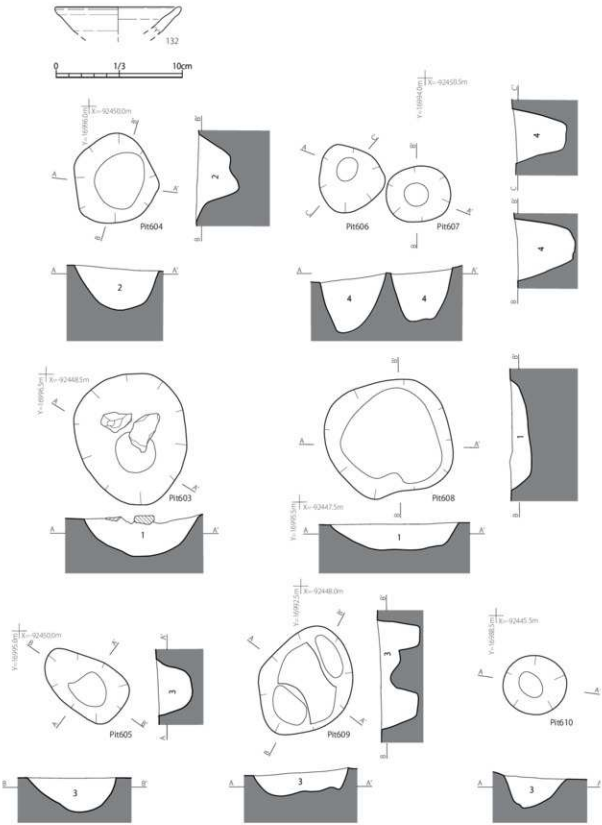


	赤褐色(2.5YR4/8)	しまりややあり。粘性ややあり。赤化著しい。地山も赤化。
	暗赤褐色(2.5YR3/3)	土間の赤化がシミ状に認められる。
	に ぶい黄橙色(10YR6/4)	所々に焼土が散る。まざりなし。
	黒褐色土(7.5YR2/2)	しまりややあり。粘性ややあり。炭化材・焼土ブロック(径10mm程度)を中量含む。粘土をスジ状に含む。土間式台石の据り込みフク土(撤去後のフク土)

1　黒褐色土 (7.5YR2/2)　しまりややあり。粘性ややあり。炭化材、焼土ブロック粘土をスジ状に含む。土間式台の据り込みフク土【撤去後のフク土】
2　にぶい黄橙色 (10YR6/4) しまりややあり。粘性なし。所々に焼土が散る。まざりなし。
3　明赤褐色 (2.5YR5/8)　しまりあり。粘性なし。粘土の赤化が著しい。
4　黒色土 (7.5YR2/1)　しまりあり。粘性なし。地山がくぼむ構造か？上層赤化、上面炭化材あり。

第62図　ＳＸ６０６の北側土層

第63図　ＳＸ６０６



1　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまりなし、粘性なし、溶岩礫少量含む、(Pit603のフク土)
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまりあり、粘性ややあり、炭化材少量、粘土粒子を少量含む、(第2～第3の遺構)
3　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまりなし、粘性ややあり、
4　黒色土(7.5YR2/1)　しまりややあり、粘性ややあり、地山粒子を中量含む。

第64図　Pit 603～Pit 610

れていた部分と考えられる。この規模は明治10年頃に作られ、平成24年に解体された主屋の土間から建物に上がるために存在した二つの石の一個分の大きさと一致する。

Pit 603

北西ブロックにおいてX＝-92448.9m、Y＝16997.0m付近において検出。70cm×58cm、深さ20cmを測る。かわらけ1点（132）が出土したが、年代は不明。駿河周辺で作られた製品と考えられる。

Pit 604

北西ブロックにおいてX＝-92450.4m、Y＝16996.2m付近において検出。45cm×48cm、深さ21cmを測る。遺物は出土していない。

Pit 605

北西ブロックにおいてX＝-92450.3m、Y＝16995.4m付近において検出。47cm×29cm、深さ18cmを測る。遺物は出土していない。

第65図　第3面ピット検出状況（南から）

Pit 606

北西ブロックにおいてX＝-92450.0m、Y＝16993.6m付近において検出。33cm×35cm、深さ29cmを測る。遺物は出土していない。

Pit 607

北西ブロックにおいてX＝-92450.2m、Y＝16993.9m付近において検出。29cm×33cm、深さ26cmを測る。遺物は出土していない。

Pit 608

北西ブロックにおいてX＝-92447.2m、Y＝16996.0m付近において検出。第3面において検出したものの第2面の建物の方眼を重ねると「八ノ十」の箇所に一致するため、礎石の抜き取りに伴うピットの可能性もある。67cm×60cm、深さ13cmを測る。遺物は出土していない。

Pit 609

北西ブロックにおいてX＝-92448.0m、Y＝16992.5m付近において検出。62cm×48cm、深さ22cmを測る。遺物は出土していない。

Pit 610

北西ブロックにおいてX＝-92445.8m、Y＝16988.7m付近において検出。33cm×30cm、深さ16cmを測る。遺物は出土していない。

第２表　出土遺物観察表

番号	胎質	R 番号	挿図	図版	Gr/Tr	遺構名	層位	時代		推定産地	器種	装飾・特徴
1	瓦	731	第 37 図	PL.8		SK601	覆土				軒丸瓦	連珠右三巴文
2	瓦	731	第 37 図	PL.8		SK601	覆土				軒桟瓦	均整唐草文　中心飾り菊文
3	瓦	731	第 37 図	PL.8		SK601	覆土				軒桟瓦	均整唐草文　東海式
4	瓦	731	第 37 図			SK601	覆土				軒桟瓦	均整唐草文　東海式
5	瓦	731	第 37 図			SK601	覆土				軒桟瓦	均整唐草文　東海式
6	瓦	731	第 37 図			SK601	覆土				軒桟瓦	均整唐草文　東海式
7	瓦	731	第 38 図	PL.8		SK601	覆土				軒丸瓦	瓦当面欠損　内面抜取紐痕
8	瓦	731	第 38 図			SK601	覆土				平・桟瓦	小口刻印「丸に「一」」
9	瓦	731	第 38 図			SK601	覆土				平・桟瓦	右辺打ち欠き
10	瓦	731	第 39 図			SK601	覆土				桟瓦	
11	瓦	731	第 39 図			SK601	覆土				桟瓦	
12	瓦	731	第 39 図			SK601	覆土				桟瓦	
13	瓦	731	第 40 図			SK601	覆土				熨斗瓦	表面に分割線　小口刻印「丸に「一」」焼成後分割
14	瓦	731	第 40 図			SK601	覆土				熨斗瓦	裏面に分割線　焼成後分割
15	瓦	731	第 40 図			SK601	覆土				熨斗瓦	焼成後穿孔 1
16	瓦	731	第 40 図			SK601	覆土				熨斗瓦	裏面に分割線　焼成後分割
17	瓦	731	第 41 図			SK601	覆土				伏間瓦	
18	瓦	731	第 41 図			SK601	覆土				袖桟瓦（右）	表面・袖部外面に朱線
19	瓦	731	第 42 図			SK601	覆土				袖桟瓦（左）	桟部打ち欠き　袖部外面に刻線および朱線
20	瓦	731	第 42 図			SK601	覆土				袖桟瓦（左）	小口に刻印「丸に「二」カ」　桟部打ち欠き　焼成後穿孔 1
21	瓦	731	第 43 図	PL.8		SK601	覆土				海鼠瓦	表面各辺沿いに刻線　穿孔部 2 箇所鉄釘残存
22	瓦	731	第 43 図			SK601	覆土				海鼠瓦	
23	瓦	731	第 43 図			SK601	覆土				不明	道具瓦破片　端部に刃物傷？あり
24	瓦	731	第 43 図	PL.8		SK601	覆土				鬼瓦？	
25	磁器	707	第 44 図	PL.8		SK601	黒色土中	18c 末～19c 前半	中国		碗	景徳鎮窯　染付　二次被熱
28	陶器	704	第 44 図	PL.8		SK601	黒色土中	17c 末～18c 前	肥前		鉢	京焼風陶器
26	磁器	690	第 47 図	PL.8		SX601	黒色土上面	19c	中国		碗	徳化窯　端反形　口縁部釉剥ぎ
27	磁器	740	第 47 図	PL.8		SX601	大礫層黒色土	17c 末～18c 初	肥前		碗	外面青磁　口銹
29	陶器	759, 834	第 47 図	PL.8		SX601	大礫層黒色土	18c 中	肥前		碗	京焼風陶器
30	磁器	633	第 47 図	PL.8		SX601	上面	19c 前半	瀬戸・美濃		碗	染付
31	陶器	750,760, 772,836	第 47 図	PL.8		SX601	大礫層・黒色土	18c 前半	京都・信楽		碗	半球形　銹絵　灰釉
32	土器	766	第 47 図	PL.8		SX601	大礫層・黒色土	18c 前	江戸在地		焙烙	
33	土器	61, 837	第 47 図	PL.8		SX601	大礫層黒色土		江戸在地		かわらけ	左回転糸切底　底部墨書
34	土器	756	第 47 図	PL.8		SX601	大礫層黒色土		在地		かわらけ	底部回転ヘラ削り
35	土器	744, 824	第 47 図	PL.8		SX601	大礫層黒色土		在地		かわらけ	右回転糸切底
36	陶器	835	第 47 図	PL.9		SX601	大礫層黒色土	18c 前	瀬戸美濃		灯明皿	灰釉　見込目跡残 1　口縁部煤付着
37	陶器	762	第 47 図	PL.9		SX601	大礫層黒色土	18c 前	瀬戸美濃		灯明皿	灰釉　見込目跡残 1
38	陶器	626	第 47 図	PL.9		SX601	上面	19c 前～中	瀬戸美濃		灯明皿	鉄釉　見込重ね焼き痕
39	陶器	626	第 47 図	PL.9		SX601	上面	19c 前～中	瀬戸美濃		油受け皿	鉄釉　腰部重ね焼き痕
40	土器	828	第 47 図	PL.9		SX601	大礫層黒色土	17c 末～18c 前			塩壺蓋	内面布目

番号	胎質	R番号	掲図	図版	Gr/Tr	遺構名	層位	時代	推定産地	器種	装飾・特徴
41	土器	751	第47図	PL.9		SX601	大礫層 黒色土	18c 前		塩壺蓋	内面布目
42	**土器**	**758**	**第47図**	**PL.9**		**SX601**	**大礫層 黒色土**	**18c 前半**		**塩壺蓋**	**内面布目**
43	陶器	771, 832, 839	第47図	PL.9		SX601	大礫層 黒色土	18c 後 ～ 19c 中	京都・信楽	土瓶蓋	灰釉　口受部外面墨書
44	**瓦**	**635**	**第48図**			**SX601**	**上面**			**海鼠瓦**	**表面各辺沿いに刻線**
45	銭	735	第48図	PL.9	南西	SX601	大レキ下層			寛永通宝	
46	**鉄製品**	**1041**	**第49図**	**PL.9**		**SX602**	**SX602 の下**				
47	鉄製品	1042	第49図	PL.9		SX602	SX602 の下				
48	**鉄製品**	**1066**	**第49図**	**PL.9**		**SX602**	**SX602 の下**				
49	磁器	872	第54図	PL.9	北西	第2面	黒色土中	17c 前	中国	碗	景徳鎮窯　白磁　陽刻文
50	**磁器**	**610, 611**	**第54図**	**PL.9**	**北西**	**第2面**	**礫層中**	**18c 末 ～ 19c 前**	**中国**	**碗**	**徳化窯　端反形　口縁部釉剥ぎ　白磁**
51	陶器	728	第54図	PL.9	北西	第2面	黒色土中	18c 中	京都信楽	碗	灰釉
52	**陶器**	**883, 895**	**第54図**	**PL.9**	**北西**	**第2面**	**黒色土中**	**18c 中**	**京都信楽**	**碗**	**灰釉**
53	陶器	901	第54図	PL.9	北西	第2面	黒色土中	17c 末 ～ 18c 初	瀬戸美濃	碗	腰錆碗　灰釉・鉄釉掛け分け
54	**磁器**	**1024**	**第54図**	**PL.9**	**南東**	**第2面**	**黒色土直上**	**19c 中**	**瀬戸美濃**	**碗**	**湯呑碗　染付**
55	陶器	978	第54図	PL.9	北西	第2面	黒色土中	17c 前	瀬戸美濃	碗	天目形　鉄釉
56	**陶器**	**703**	**第54図**	**PL.9**	**北西**	**第2面**	**黒色土上面**	**17c 末 ～ 18c 初**	**肥前**	**碗**	**京焼風陶器　呉須絵　山水文　底部刻印「清水」**
57	磁器	674	第54図	PL.10	南東	第2面	黒色土	17c 末	肥前	碗	半球形　染付
58	**磁器**	**949**	**第54図**	**PL.10**	**北西**	**第2面**	**黒色土中**	**17c 後**	**肥前**	**碗**	**染付**
59	磁器	729	第54図	PL.10	北西	第2面	黒色土中	17c 末 ～ 18c 初	肥前	碗	青磁染付　見込コンニャク印判
60	**陶器**	**896, 1022**	**第54図**	**PL.10**	**北西**	**第2面**	**黒色土中**	**17c 末 ～ 18c 初**	**肥前**	**碗**	**呉器手　灰釉**
61	磁器	865	第54図	PL.10	北西	第2面	黒色土中	17c 末 ～ 18c 初	肥前	碗	外面青磁　口銹
62	**磁器**	**654, 727, 943, 945**	**第54図**	**PL.10**	**北西**	**第2面**	**黒色土中**	**19c 前～中**	**肥前**	**碗**	**端反形　染付　焼継痕　底部焼継印（線）　№ 41・56 と同一種**
63	磁器	645, 646	第54図	PL.10	北西	第2面	黒色土上面	19c 前～中	肥前	碗	端反形　染付　焼継痕　底部焼継印（線）62・65 と同一種
64	**磁器**	**725, 887**	**第54図**	**PL.10**	**北西**	**第2面**	**黒色土中**	**19c 前～中**	**肥前**	**碗**	**端反形　染付**
65	磁器	703	第54図	PL.10	北西	第2面	黒色土中	19c 前～中	肥前	碗	端反形　染付　62・63 と同一種
66	**磁器**	**656,659, 813,890, 973**	**第54図**	**PL.10**	**北西**	**第2面**	**黒色土中**	**19c 中**	**肥前**	**碗**	**湯呑碗　染付**
67	磁器	1025	第54図	PL.10	南東	第2面	黒色土直上	17c 末	肥前	碗	白磁　うがい茶碗
68	**磁器**	**1038**	**第54図**		**南東**	**第2面**	**黒色土上面**	**16c 前 ～ 17c**	**中国**	**皿**	**景徳鎮窯　陽刻文　明末**
69	磁器	617	第54図		南西	第2面	大礫層表土	17c 末 ～ 18c 前	肥前	皿	染付
70	**磁器**	**611, 809**	**第54図**		**北西**	**第2面**	**黒色土中**	**19c 前～中**	**肥前**	**皿**	**輪花　染付　焼継痕**
71	磁器	648	第54図		北西	第2面	黒色土上面	18c 前	肥前	皿	見込蛇ノ目釉剥ぎ　口縁部敲打痕　見込・底部煤付着
72	**磁器**	**918**	**第54図**		**北西**	**第2面**	**黒色土中**	**17c 前半**	**肥前**	**皿**	**初期伊万里　輪花　白磁　蛍付砂付着**
73	陶器	718	第54図		北西	第2面	黒色土中	17c 前半	瀬戸美濃	鉢	灰釉　漆継痕？
74	**磁器**	**1059**	**第54図**		**南東**	**第2面**	**黒色土上面**	**17c 後 ～ 18c 前半**	**中国**	**鉢**	**景徳鎮窯　染付　清朝　二次被熱**
75	土器	606	第54図	PL.10	南東	第2面	礫層中			かわらけ	磨きかわらけ　体部～底部平滑
76	**磁器**	**674, 1043, 1076**	**第54図**	**PL.10**	**南東**	**第2面**	**黒色土上面**	**18c 末 ～ 19c 前**	**肥前**	**猪口**	**染付　蛇ノ目凹形高台**

番号	胎質	月番号	挿図	図版	Gr/Tr	遺構名	層位	時代	推定産地	器種	装飾・特徴
77	陶器	695, 1049	第 54 図	PL.10	南東	第 2 面	黒色土上面	17c 末～18c 初	京都信楽	猪口	縁込手　底部無釉　見込目跡残 2　見込擦痕　見込赤色物質付着　二次被熱
78	**磁器**	**609,610, 611,672, 793**	**第 55 図**	**PL.10**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土上面**	**19c 前～中**	**肥前**	**御神酒徳利**	**鶴首形　染付**
79	陶器	647,721, 954,956	第 55 図	PL.10	北西	第 2 面	黒色土中	19c 後～近代	京都信楽	急須	上絵付（青・黄・緑・紫・黒）　白泥下地に灰釉施釉　注口部・把手部欠損
80	**磁器**	**670**	**第 55 図**	**PL.10**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土上面**	**17c 末～18c 前**	**肥前**	**合子**	**蓋受部・底部無釉**
81	磁器	687	第 55 図	PL.10	北東	第 2 面	黒色土上面	17c 後半？	肥前	銚子	把手部～胴部破片　菊花文貼付　染付
82	**磁器**	**808**	**第 55 図**	**PL.10**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土中**	**19c 中**	**瀬戸美濃**	**植木鉢**	**染付**
83	磁器	1062	第 55 図	PL.10	表採（第 2 面報告）			19c 前～中	肥前	植木鉢	染付・上絵付（赤・金）　No. 20 と同一個体？
84	**磁器**	**613**	**第 55 図**	**PL.10**	**北東**	**第 2 面**	**黒色土**	**19c 前～中**	**肥前**	**植木鉢**	**染付・上絵付（金）　穿孔部周囲打ち欠き　底部墨書 83 と同一個体？**
85	土製品	661	第 55 図	PL.9	北西	第 2 面	黒色土上面	19c		人形	土師質　褐色　前後型合せ　中空　内面指頭痕
86	**陶器**	**726**	**第 55 図**	**PL.11**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土中**	**19c 中**	**備前**	**壺蓋**	**条線文　火襷　外面鉄泥**
87	陶器	817	第 55 図	PL.11	北西	第 2 面	黒色土中	19c 前～中	瀬戸美濃	鍋	鉄釉　見込目跡残 1　底部煤付着
88	**磁器**	**722**	**第 55 図**	**PL.11**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土中**	**17c 後**	**肥前**	**碗蓋**	**染付　口銹**
89	陶器	729	第 55 図	PL.11	北西	第 2 面	黒色土中	18c 後半	京都	土瓶	銹絵　灰釉
90	**陶器**	**651**	**第 55 図**	**PL.11**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土上面**	**19c 前半**	**京都信楽**	**土瓶**	**外面白泥下地に灰釉施釉　内面灰釉　底部煤付着**
91	陶器	688	第 56 図	PL.11	北東	第 2 面	黒色土上面	17c 末～18c 前半	瀬戸美濃	灯明皿	鉄釉　紐状把手　蛍付溶着痕　口縁部一部打ち欠き
92	**陶器**	**680,682, 683**	**第 56 図**	**PL.11**	**北東**	**第 2 面**	**黒色土**	**18c 前半**	**瀬戸美濃**	**灯明皿**	**灰釉　紐状把手**
93	陶器	1075	第 56 図	PL.11	南東	第 2 面	黒色土上面	17c 末～18c 前	備前	灯明皿	回転糸切底　二次被熱
94	**陶器**	**1045**	**第 56 図**	**PL.11**	**南東**	**第 2 面**	**黒色土上面**	**17c 末～18c 前**	**備前**	**油受け皿**	
95	陶器	1075	第 56 図	PL.11	南東	第 2 面	黒色土上面	17c 末～18c 前	備前	油受け皿	回転糸切底
96	**陶器**	**891, 892, 995**	**第 56 図**	**PL.11**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土中**	**19c 前～中**	**瀬戸美濃**	**灯明皿**	**鉄釉　見込重ね焼き痕　口縁部煤付着　内外面黄褐色物質付着**
97	陶器	658, 660	第 56 図	PL.11	北西	第 2 面	黒色土上面	19c 前～中	瀬戸美濃	灯明皿	鉄釉　見込重ね焼き痕　口縁部煤付着　内外面黄褐色物質付着
98	**陶器**	**671**	**第 56 図**	**PL.11**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土上面**	**19c 前～中**	**瀬戸美濃**	**灯明皿**	**鉄釉　見込・底部重ね焼き痕　内外面黄褐色物質付着**
99	陶器	652, 891	第 56 図	PL.11	北西	第 2 面	黒色土中	19c 前～中	瀬戸美濃	灯明皿	鉄釉　見込・底部重ね焼き痕　口縁部煤付着　内外面黄褐色物質付着
100	**陶器**	**649, 724**	**第 56 図**	**PL.12**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土中**	**19c 前～中**	**瀬戸美濃**	**灯明皿**	**鉄釉　見込・底部重ね焼き痕**
101	陶器	674, 1044	第 56 図	PL.12	南東	第 2 面	黒色土上面	19c 前～中	瀬戸美濃	灯明皿	鉄釉　見込・腰部重ね焼き痕　内外面黄褐色物質付着
102	**陶器**	**651, 652, 995**	**第 56 図**	**PL.12**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土上面**	**19c 前～中**	**瀬戸美濃**	**灯明皿**	**鉄釉　見込重ね焼き痕　口縁部煤付着　内外面黄褐色物質付着**
103	陶器	676	第 56 図	PL.12	北東	第 2 面	黒色土	19c 中～後	瀬戸美濃	灯明皿	灰釉　縁内に菊花文貼付　口縁部・底部煤付着
104	**陶器**	**814, 815**	**第 56 図**	**PL.12**	**北西**	**第 2 面**	**黒色土中**	**19c 後半**	**瀬戸美濃**	**灯明皿**	**灰釉　見込重ね焼き痕**

番号	胎質	R番号	挿図	図版	Gr/Tr	遺構名	層位	時代		推定産地	器種	装飾・特徴
105	陶器	660	第56図	PL.12	北西	第2面	黒色土上面	19c後		瀬戸美濃	油受け皿	灰釉　皿受部・腰部重ね焼き痕　内面黄褐色物質付着
106	**陶器**	**926**	**第56図**	**PL.12**	**北東**	**第2面**	**黒色土中**	**19c前～中**		**瀬戸美濃**	**油受け皿**	**鉄釉　腰部重ね焼き痕**
107	陶器	689	第56図	PL.12	北東	第2面	黒色土上面	19c後半		瀬戸美濃	油受け皿	灰釉　皿受部・腰部重ね焼き痕
108	**陶器**	**653**	**第56図**	**PL.12**	**北西**	**第2面**	**黒色土上面**	**19c前～中**		**瀬戸美濃**	**油受け皿**	**鉄釉　皿受部・腰部重ね焼き痕**
109	瓦	613	第57図		北東	第2面	黒色土				軒平瓦	・均整唐草文　東海式
110	**瓦**	**700**	**第57図**		**北東**	**第2面**	**上層**				**輪違瓦**	
111	瓦	1089	第57図		南東	第2面	大レキ層中				丸瓦	
112	**瓦**	**1089**	**第57図**		**南東**	**第2面**	**大レキ層中**				**熨斗瓦**	**小口に刻印「カギに「正」」**
113	瓦	1089	第57図		南東	第2面	大レキ層中				熨斗瓦	表面に分割線・刻線・朱線および擦痕あり
114	**瓦**	**1089**	**第57図**		**南東**	**第2面**	**大レキ層中**				**不明**	**海鼠瓦？**
115	瓦	666	第57図		北西	第2面	黒色土上面				海鼠瓦	表面に刻線
116	**瓦**	**1089**	**第57図**		**南東**	**第2面**	**大レキ層中**				**桟瓦？**	
117	瓦	730	第57図		南西	第2面	黒色土中				桟瓦？	
118	**瓦**	**638**	**第57図**		**南西**	**第2面**	**黒色土上面**				**不明**	**道具瓦破片**
119	瓦	1089	第58図		南東	第2面	大レキ層中				桟瓦	小口に刻印「丸に「一」」
120	**瓦**	**1089**	**第58図**		**南東**	**第2面**	**大レキ層中**				**桟瓦**	**小口に刻印「丸に「一」」**
121	瓦	1089	第59図		南東	第2面	大レキ層中				谷桟瓦	桟部表裏面に漆喰付着
122	**瓦**	**1089**	**第60図**		**南東**	**第2面**	**大レキ層中**				**谷桟瓦**	**桟部表面に漆喰付着**
123	鉄製品	783	第61図	PL.12	南西		黒色土中					
124	**銭**	**1087**	**第61図**	**PL.12**	**北東**			**1008～**	**北宋**		**祥符元宝**	
125	銭	805	第61図	PL.12	北西		黒色土	1098～	北宋		元符通宝	
126	**銭**	**679**	**第61図**	**PL.12**	**北東**		**黒色土上面**				**寛永通宝**	
127	銭	655	第61図	PL.12	北西		黒色土上面				寛永通宝	
128	**銭**	**1029**	**第61図**	**PL.12**	**南東**		**黒色土上面**				**寛永通宝**	
129	銭	876	第61図	PL.12	北西		黒色土中				寛永通宝	
130	**銭**	**851**	**第61図**	**PL.12**	**北西**		**黒色土**				**寛永通宝**	
131	銭	698	第61図	PL.12	南東		黒色土上面				寛永通宝	
132	**土器**	**1085**	**第64図**	**PL.12**	**北西**	**PIT603**					**かわらけ**	

第4章　考察

第1節　六所家敷地内出土瓦の様相

金子　智

はじめに

富士市今泉八丁目所在の六所家（東泉院跡）において、平成25年度に行われた埋蔵文化財発掘調査（6次調査）では、SK601（土坑）を中心に多数の瓦が出土した。ここでは、SK601出土資料を中心に、5次調査以前の所見も加えながら、六所家敷地内出土瓦について分析する。

なお、富士市域での近世瓦の調査例は少ないため、本論では主に江戸遺跡（近世都市「江戸」の遺跡）および東海地域（三河・尾張）の事例を参考に分析を行った。

1　6次調査における瓦の出土状況

六所家第6次調査では、調査地北東側を中心に多くの瓦が出土した。中でもSK601からは一括性の高い瓦群が出土しており、その点数は3,839点に及ぶ（第33図）。SK601は当所に存在した寺院「東泉院」の文久2年（1862）に描かれた絵図に見える建物（以下、文久建物）の直下に位置することから、少なくとも文久建物が建設される以前に、構築・廃棄された遺構であることが明らかである。

このほか、第2面として取り上げられた瓦がある程度まとまっており、SK601とは異なる様相を示す資料として注目される。

2　SK601出土瓦について

概要

SK601は調査区北東部に位置する縦5.2m横2.6m深さ0.2mほどの不整形の土坑である。瓦は土坑に充填されるような形で多量に出土した。瓦で大型の礫を混入するほかは他の遺物の混入が少ないことから、瓦廃棄土坑と考えられる。

含まれる瓦は多様な瓦種に及ぶが、焼成や調整の特徴を一にし、一括性の高い資料群といえる。2次、3次調査で確認されたSE2出土瓦が複数の時期、建物の瓦が混在する様相を示していたのに対し、SK601は軒瓦の笵型数も少なく、一群のものと推測される。これらの瓦をみると、以下のような共通点が見いだせる。

まず焼成は良く、表面の色調は灰色で、ややいぶしがかかっているように見えるがむらがあり、胎土色に近い灰白色を呈する部分もある。全体に淡い色調である。

次に胎土は灰白色を呈し、径0.5～2mm程度の暗灰色岩石粒を目立って含む、やや特異な印象のものである。白色粘土により斑状、縞状を呈する部分もある。

調整は概して丁寧であるが、特に上製というほどではない。瓦種によるが「丸に「一」」の刻印を有するものがある。

以上、同様の瓦はSX601や一括出土資料にも含まれ、同時期の廃棄によるものと考えられる。

瓦種と分類

上記のとおり、SK601から出土した瓦は、瓦当文様や製作・調整にきわめて斉一性が高く、一棟の建物に由来する可能性が指摘できる。瓦種としては、軒丸瓦（2点、以下いずれも接合後の点数）、軒桟瓦<軒平瓦>（63点）、丸瓦（2点）、桟瓦<平瓦>3,604点、熨斗瓦（83点）、伏間瓦（3点）、鬼瓦（1点）、袖桟瓦（左右、計38点）、海鼠瓦（13点）の計9瓦種がみられる（第1表）。軒瓦には異なる文様のものも混じるが寸法は近く、補修などの際に追加されたものと考えられる。内容的には桟瓦葺切妻屋根の建物に用いられたものである。

以下、一部本報告と重複するが、出土瓦の瓦種ごとの概要を記す（番号は前掲第37図～第43図）。なお、各瓦種には文様形態をもとに適宜分類番号を付した。（表記については［千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会2002］に準じた）

軒丸瓦（1）（第37図）

資料は1点のみである（1類・1）。連珠三巴文C種右巻（16）珠である。巴はやや小ぶりで長く、珠文はやや大きい。丸瓦とともに量が少ないのは、桟瓦葺であるためその使用が建物の一部に限られるためであろう。

軒桟瓦（2～6）（第37図）

2分類3種が見られる。

1類（3～6）は、均整唐草文の軒平部文様が共通で軒丸部文様の異なる2種がみられる（1a類、1b類とする）。軒平部は、18世紀以降尾張・三河地域で盛行する「東海式」の均整唐草文によく似た文様で、中心飾りに下部の交差する丁字風文様（珠文6個）を配し、下向き二対の唐草を配している。唐草はくびれがなく頭部が丸く膨らむ。軒丸部は連珠三巴文C種左巻12珠であるが、1a類（3～5）は巴が細く珠文が小さいのに対し、1b類（6）は巴がやや太く珠文がやや大きい。1b類は笵崩れが目立つため、1a類の摩耗したものとも考えられるが、大きく印象が異なる。

2類（2）は、七葉の半菊文を中心飾りに配し、下向き・上向きで連続する唐草を配する。唐草は背の部分にそれぞれ子葉が突出する。特徴的な点として、文様区が通常の逆台形でなく、両側辺に丸みのある横位の長小判形を呈することがあげられる。軒丸部は連珠のない左巻三巴文である。胎土や焼成は1類に似る。

丸瓦（7）（第38図）

桟瓦葺建物に由来すると考えられるため、丸瓦は少ない。いずれも遺存状態が悪いため図示していないが、軒丸瓦の体部（7）を示した。内面に抜取紐痕を有し、玉縁も比較的長いので古様だが、焼成等を見ると共伴する瓦と大差ないため、同時期のものと考えられる。抜取紐痕は江戸地域などでは17世紀代にほぼ消滅するので（軒丸瓦はわずかに新しい時期まで残る）、地域性かもしれないが桟瓦に伴う例としては特異といえる。

平瓦・桟瓦（8～12）（第38・39図）

桟瓦葺建物に由来すると考えられるため、丸瓦と同様、平瓦と特定できる資料はほとんどない。唯一8は刻印（丸に「一」）を有する資料で、左下部の破片であることから平瓦の可能性があるが、熨斗瓦かもしれない。

桟瓦（9～12）は、出土資料の大部分を占めるが、分類可能なものはいずれもほぼ同一寸法で同種のものと考えられる（1類）。多くの資料に使用痕が確認されるが、極端に摩耗したものはない。使用時に右辺を打ち欠いた痕跡の残るものもみられた（9）。

熨斗瓦（13～16）（第40図）

一般に熨斗瓦は平瓦の流用であることが多いが、SK601の瓦には専用品の熨斗瓦が含まれている。1種のみと思われ（1類）、凹面側に焼成前に分割線を刻み、焼成後分割して用いている。裏面によく見かける条線はない。一部資料の上面に方形枠状の使用痕が見られる。この形の使用痕が生じる理由ははっきりしないが、熨斗瓦の上に後述の伏間瓦が使用されていたようなので、その痕跡かもしれない。刻印「丸に「一」」を施すものがある。

伏間瓦（17）（第41図）

山形断面の伏間瓦1種（1類）が出土している。一辺に細板状の桟部を付し、他方の桟部に隠れる辺に沿って、水切りの溝を入れている。構造的には側辺の小口が表から見える形態となる。上面には丸瓦風の縦位のミガキが施される。

江戸遺跡の伏間瓦は半筒状になるものが多く、三州など地域によっては箱形、駒形を呈するものが見られるが、このような三角形を呈するものは珍しい。地元産とすればこの地域の特徴かもしれない。

袖桟瓦（18～20）（第41・42図）

袖瓦はまとまって出土している。2種に大別され、1類（18・19）は袖部が長く、葺き足が長いのに対し、2類（20）は袖部が短く葺き足が短い。1類は向かって左に使用されるもの（a）と、右に使用されるもの（b）ともに確認されている。寸法をみると1類が桟瓦と一致し、量的にも大半を占めることから、これが一連のセットのものと考えられる。2類は寸法が合わず、混入の可能性が高い。

海鼠瓦（21）（第43図）

海鼠瓦も1種（1類）が確認される。釘穴が内寄りに穿たれるもので、古い様相である。側辺には焼成後の刻線が刻まれ、辺沿いと釘穴周辺に使用痕が観察される。釘穴の裏面周囲には使用時の欠損もみられる。

不明瓦（22・23）（第43図）

小片で用途不明の瓦が見られる。

鬼瓦（24）（第43図）

鬼瓦は1点のみが確認される。唐草部分の小片で、くびれを有する唐草に沈線を施しているが、全形はわからない。

3　瓦のセット関係と年代・産地

SK601出土瓦は、上述のとおりきわめて一括性が高い。混入あるいは後補と思われる瓦を除くと、下記のセット関係が復元できる。

軒丸瓦１類・軒桟瓦１類（a/b）・（丸瓦）・桟瓦１類・（平瓦）・熨斗瓦１類・伏間瓦１類・袖桟瓦１類（a/b）・海鼠瓦１類。

複数の建物の瓦が混在した状態で出土することの多い近世遺跡の調査において、これだけの瓦種のセット関係が把握された事例はこれまでおそらくなく、きわめて稀有な事例といえる。一棟の建物に由来する瓦のみが、まとめて廃棄されたものとみていいだろう。

次にこれらの瓦の年代であるが、それを考えるうえで、本一群から以下のような要素が抽出できる。

まず、新しい要素としては、A. 桟瓦であること、B. 比較的調整が丁寧で、焼成も良好なこと、C. 軒瓦瓦当面の剥離材に雲母粉を用いていること、D. 桟部を有する伏間瓦が含まれること、が挙げられよう。

A. については、当地における桟瓦の使用開始時期にもよるが、17 世紀に遡る可能性は低いと思われる。B.C. の要素については、他地域の資料と比較して、18 世紀中葉以降の印象を受ける。D. については、近世前期以前の伏間瓦は玉縁を有するのに対し、桟部を有するタイプは後出で、18 世紀中葉以降の事例が多い。なお、袖瓦も江戸遺跡などではあまり古い事例は見ない。

一方、古い要素としては、a. 軒丸瓦体部の布目に抜取紐痕が残ること、b. 東海式に似る軒桟瓦軒平部の瓦当文様にくびれがなく、軒丸部の巴も比較的長いこと、c. 海鼠瓦の釘穴が内に寄っていること、などがある。

a. の抜取紐痕は、江戸遺跡では通常の丸瓦では 17 世紀後葉にほぼ消滅し、19 世紀まで残ることはない。b. は江戸尾張藩邸などの事例ではやや古いグループに属し、18 世紀中葉ごろの印象だが、唐草頭部がやや肥大化している点には新しい印象も受ける。c. は江戸遺跡では 18 世紀中葉以前に遡る様相だが、江戸地域以外では同種のものが現存建築にもまま見られるため、他地域ではそれ以降に下るものもあるのかもしれない。

以上の要素のうちどれが年代比定の指標たりうるのかは、当地域全体の瓦の傾向を把握して判断する必要があるが、現状では比較資料に乏しい。江戸遺跡や東海（三州・尾州）地域の資料との対比により、強いて年代を推定するとすれば、当地では古い要素がやや後の時代まで残るものと考え、完成された桟瓦の存在と調整の丁寧さなどから判断し、18 世紀後葉あたりと一応見ておきたい。（なお SK601 では瓦の集中廃棄のみで、他の共伴遺物は少なく、年代のわかる資料は含まれなかった。）

産地についても判然としないが、胎土をみると、18 ～ 19 世紀代の一般的な東海式（三州・尾州）や江戸在地系のものとは明らかに異なる。瓦当文様や技法はどちらかといえば東海式（三河・尾張）系統に近い印象を受ける。富士市域の近世瓦については情報がいまだ少ないが、現段階では三州・尾州地域の技術的影響を受けた在地の瓦と考えておきたい。

4　使用建築の想定

SK601 出土の瓦群は、年代的にみて東泉院の建物に伴うものと考えられるが、実際に使用された建物はどのようなものだろうか。

まず、主体を占める瓦からみて桟瓦葺建築であることは確実である。次に袖瓦がまとまって出土している点から、建築は切妻屋根であった可能性が高い。入母屋屋根などでも部分的に袖瓦を使用する可能性はあるが、SK601 の資料には廂隅瓦や、隅桟（平）瓦などの寄棟（宝形）屋根や入母屋屋根に使用される瓦が全く出土していないことからみて、純粋な切妻屋根と考えられる。鬼瓦の少ないのもこれを裏付ける。

一般的な寺院では、本堂では入母屋や寄棟屋根が基本である。また切妻が一般的な門でも、たいていの場合錣甲を有し、妻の部分には掛瓦を用いて袖瓦は使用されないことが多い。翻って袖瓦自体、屋根構造の単純な、簡略な切妻造建築に用いられる傾向がある。

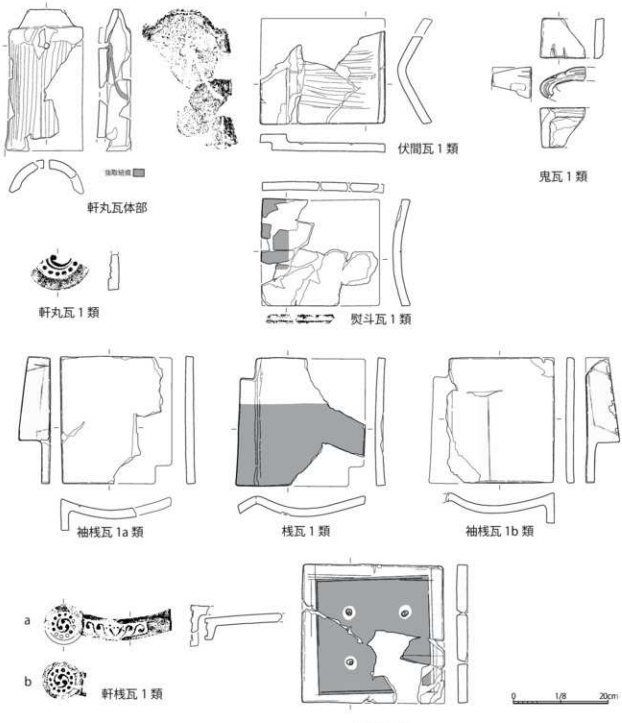
近世段階では、都市部以外の地域においては、必ずしも瓦葺は一般的なものではなかったと考えられている。当地に所在した東泉院は比較的宿場に近い立地ではあるものの、やはり瓦葺建築が寺院内や周辺にさほど多く存在したとは考えがたい。

その中で瓦葺が積極的に用いられ、なおかつ屋根構造の比較的単純な寺院内の建物としては、蔵が考えられる。東泉院には近世末の段階で宝蔵と土蔵という二つの蔵が存在したことが記録されており、このうち安政４年（1854）に建造された宝蔵が現存している。その屋根を見ると、単純な切妻屋根となっており、今回の SK601 の瓦構成に近い印象を受ける。

東泉院では、先行する宝蔵・土蔵が安政元年の大地震で倒壊した可能性が指摘されている。この時倒壊した（と推定される）蔵の構造は不明であるが、現存する宝蔵

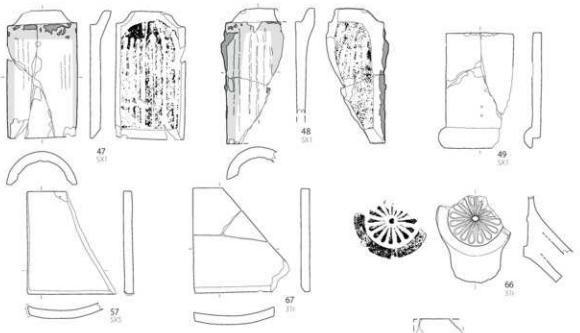
が先行建築の屋根構造を踏襲しているとすれば、SK601出土の瓦は先行する蔵（土蔵か宝蔵、あるいは別の蔵かもしれない）の桟瓦葺切妻屋根に由来する瓦と推定することができよう。海鼠瓦の存在も、防火性を重視する蔵のものとしてふさわしい。

上記の仮定をもとにすれば、SK601の一群の瓦は、安政元年（1851）以前に存在した蔵に使用されたものであり、その製作年代は安政元年以前に、先行する蔵が建てられた年と考えることができる。また、瓦の廃棄年代（SK601の構築年代）は、安政元年の地震による蔵の倒壊以降、安政4年の再建以前と考えることができよう。

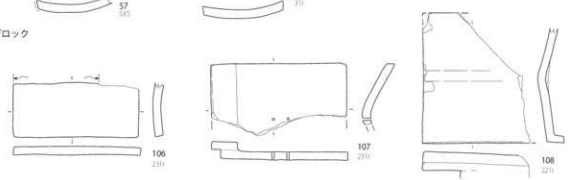


第66図　SK601出土瓦のセット関係

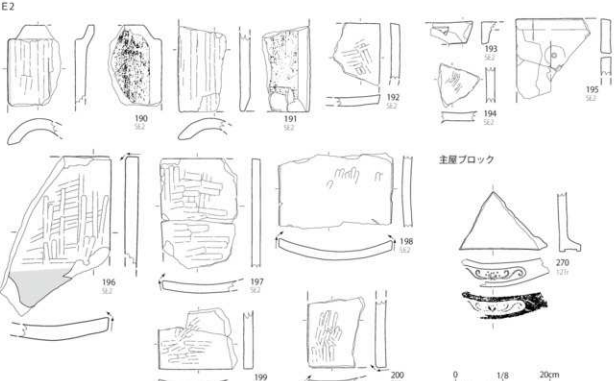
東ブロック



西ブロック



SE2



主屋ブロック

第67図　これまでに出土した瓦

東泉院では寛政９年（1797）に主屋の再建が記録されており、この時期の再建も行われているとすれば、やや古様の要素が見られるものの、この年代がSK601出土瓦の製作時期の候補となろう。

5　その他の遺構からの出土瓦について

６次調査ではSK601以外からも瓦が出土している。

SX601（建物の土間部分の可能性）からは、海鼠瓦１類（44）（第48図）が出土している。SK601から多数出土しているもので、一連のものと考えられる。本資料は漆喰目安の刻線が中央に寄っており、使用痕もそれに伴い偏っている。壁面の外周で使用されたものであろう。

第２面一括として取り上げられている瓦（以下、第57～60図）には、さまざまなものが混在している。109は軒桟瓦で中心飾りが残らないが、いわゆる「東海式」軒桟瓦の一部であろう。19世紀中葉以降のものと考えられ、近代のものかもしれない。111は丸瓦でSK601出土の軒丸瓦体部に似る。110は輪違瓦である。112は熨斗瓦で、SK601のものに似るが、刻印が異なる（金に「正」）。114は不明。115は海鼠瓦１類か。116は伏間瓦１類か。117は目板状の桟部を有する桟瓦か。118は水返しを有する平瓦風のものだが、よくわからない。

第２面一括の資料で良好なものとして桟瓦と谷桟瓦がある。桟瓦は刻印「丸に「一」」を有し、寸法はSK601の１類よりも一回り大きい（２類、119・120）。またこれに伴うと思われる谷桟瓦は長大で（１類、121・122）、長い垂れ部が印象的である。ともに桟部上面に丸瓦風のミガキが観察され、「東海式」に近い印象のものである。これらは明らかにSK601の一群とは異なるものであり、谷瓦の存在から屋根に屈曲部を有する建物と考えられる。調整からは19世紀中葉に下る可能性が高く、文久建物（客殿）あるいは近代以降の建物（旧母屋など）の混入かもしれない。

6　５次調査以前の出土瓦との比較

いずれも一括性の低い資料であるが、ここで『六所家総合調査報告書　埋蔵文化財』をもとに以前の調査で出土した瓦について触れておこう（以下、番号は上記報告書の図版番号、第67図に再掲）。

東ブロックからは19世紀代の瓦が中心に出土している。SX1からはいわゆる「紺丸瓦」が出土しており（第31図49）、明らかに明治時代後半以降のものである。丸瓦など一部は近世に遡る可能性もあるが（第31図47・48）、さほど古い印象はなく、19世紀代のものであろう。特徴的なものとしては軒桟瓦の下部に用いられる「敷平瓦」と思われる資料がSX5などから出土している（第31図57・67）ほか、菊花文の鳥伏間瓦（第31図66）が確認されている。いずれも19世紀代の資料と考えられる。

西ブロック出土の資料も、ほぼ19世紀以降のもので占められる。一部にSK601で確認された熨斗瓦１類（第36図106）、伏間瓦１類（第36図107）と思われる資料が見受けられる。谷底平瓦とおぼしき資料もみられるが（第36図108）、類品の少ない珍しい形態のものである（図の凹面が上と考えられる）。

北ブロックでは、SE2から、やや時代の遡る瓦が出土している。陶磁器の分析からは1780年代が年代の下限と考えられており、瓦も全体には18世紀後葉と思われるものが多いが、丸瓦・平瓦・海鼠瓦などに古様の資料が含まれ、これらは18世紀中葉以前に遡る可能性が高い。本瓦葺の瓦には焼成の甘い資料が含まれるが、これらは17世紀代に遡る可能性もあり、東泉院において比較的早い段階から瓦葺建物が存在した可能性を示している。

主屋ブロックでは、軒（平）桟瓦および輪違瓦が確認されている。軒（平）桟瓦（第70図270）は文様繊細だが、瓦当が右端で細くなるという新しい要素が見られ、焼成から見ても近代以降のものと思われる。

7　まとめ

六所家敷地内出土の瓦は、近代以降のものを除き、ほぼ東泉院に使用されたものと考えられる。その初現はSE2出土瓦の様相からみて、少なくとも18世紀前半に遡ると考えられる。ただしその出土は今のところ限られている。

SK601は、瓦の一括廃棄としては今のところ唯一の遺構であるが、ほぼ一棟の建物の瓦で占められ、切妻屋根の葺由来のものと推定された。その年代については不確定要素が強いが、18世紀末の修復（寛政９年（1797）頃か）にともなうものと考えたい。産地についてもはっきりしないが、一応地元産と考えておく。

SK601 以外の出土瓦については断片的であるが、6次調査で第2面から出土している大型の桟瓦・谷桟瓦は、本格的な建物に伴うものと考えられる。近代の可能性も残るが、近世に遡るものとすれば幕末、文久建物に使用されたものかもしれない。

六所家敷地内の調査は、これまで調査事例の少ない富士市域の近世瓦の様相をうかがううえで非常に貴重な資料を提供するものとなった。特に SK601 の一括資料は、近世後半期の在地における瓦の普及を考えるうえで興味深い資料である。今後近隣他遺跡の資料や地方文書の調査による、さらなる情報の蓄積に期待したい。

引用文献

千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2002『東京駅八重洲北口遺跡』

第２節　考古学的視点から見た東泉院の民俗資料

佐藤祐樹

はじめに

富士市教育委員会では、六所家総合調査委員会を組織し、古文書、書画、民俗、富士山信仰、埋蔵文化財、建造物・庭園の各分野の調査を実施してきた。そして、平成24年度より、各分野の先頭を切って民俗分野の報告書が刊行された。報告書の中心は、東泉院における祭事、宗教行事などについての報告であり、資料編として、図録集、目録が示されている。

しかし、民俗学という学問領域からのアプローチのみでは、資料自体がもつ情報を広く抽出することに限界もある。その一方、物質文化を主な対象とする考古学的手法ならば、資料自体の持つ情報へのアプローチが可能であると考えた。具体的には、湯呑みをはじめとした陶磁器類の製作年代や流通過程、入手経路・経緯そしてその背景など多岐にわたる領域まで迫れる可能性があるのではないかと考えたのである。

発掘して出土したものは埋蔵文化財、蔵や建物に残されたものは民俗分野として、横断的に報告されない状況は、学際的調査研究の意義がないのである。

1　資料の抽出方法

民俗資料として目録で示された資料は1375点に及ぶ。データベース上での管理により、収蔵場所、箱書き、写真などを見ることが出来るようになっている。その『民俗資料整理カード』の中から漆器や陶磁器類の名称がつけられているものを選択し、添付されている比較的鮮明な写真から近世に作られた、もしくはその可能性がある資料を抽出し、収蔵されている資料を実見した。その結果、21点の資料が抽出されたため、考古学的手法による図化作業を行った。

第68図　民俗資料データベース（本書137の資料）

2　資料報告

133（1610、以下カッコ内は民俗資料整理番号）は19世紀前葉から中葉に作られた肥前の染付け大皿である。見込み、外面に蜻唐草文が描かれ、底部には「太明成化年製」の銘が認められる。口縁部から底部にかけてヒビが認められ、修復のために７箇所の鎹継ぎがある。口径33.5cm、器高6.6cm、底径7.1cmを測る。木箱には「唐草大皿　壱」とある。

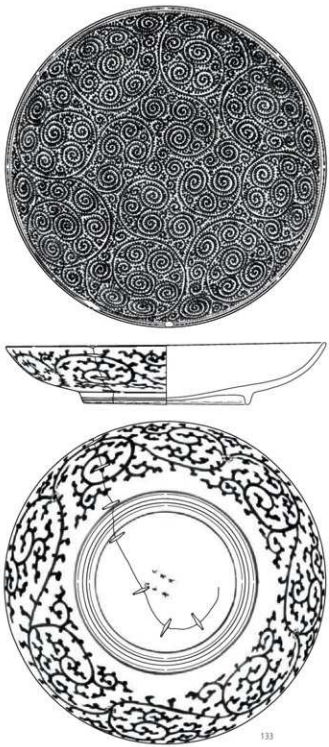
134（2610）は18世紀後半に作られた、肥前の染付け大皿である。内面には菊牡丹文が、外面には唐草文が描かれている。底部には「太明成化年製」の銘が認められ、10箇所の目跡が見られる。口径43.7cm、器高8.6から8.9cm、底径23.3cmを測る。18世紀後半にこのサイズの大皿はあまり見られず珍しいといえる。

135（2611）は19世紀中葉に作られた肥前の染付け大皿である。内面には牡丹双蝶文が描かれている。底部には「乾」カの銘が認められ、６箇所の目跡が観察される。口径43.2cm、器高6.3cm、底径23.3cmを測る。

136（1974）は、19世紀第２～３四半紀に肥前志田窯で作られた染付輪花大皿である。口唇部が端反形を呈する。内面には墨弾きで雲鶴文が描かれている。底部には目跡が６個所観察される。「お盆用」と描かれた札が一緒に入っていた。

137（2330）は、ヨーロッパ製プリントウェア皿である。嘉永６年(1853)銘のある共箱に入れられており、「嘉永六癸丑年十月吉日　古渡之皿鉢　一枚　東泉院　現住印斎雄代覚之」と墨書きがある。既に一部、報告している資料である（堀内2014）。

138から146は、いずれも京都で作られた「内ぐもり」と呼ばれる「かわらけ」である。138から140、141から143、144から146の３枚１セットで箱に入っていた。138から140、141から143は、サイズが等し

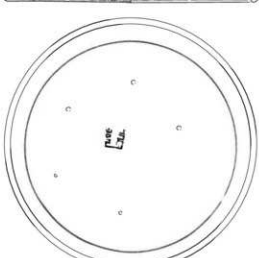


第69図

134

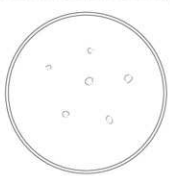
第 70 図

135



第71図

136



137

0　1/4　20cm

第 72 図

く同時期に入手したものと考えられる。144 から 146 は、ひとまわり大きく、さらに底部に「深草平田製」とある。近世か近代か区別がつかない製品である。胎土はいずれも精緻な白色粘土を使用している。138 から 146 のかわらけは、それぞれが 3 枚セットで桐箱に大切に収納されていた。詳細が明らかでなく評価が定まらないが、仮に近世東泉院の頃のものであれば、神事に使用するために特別に入手したものとも考えられる。

147 もかわらけである。赤褐色を呈し、見込みに陽刻で三つ葉葵文が鮮明に観察される。また、口縁部には、金泥が認められる。製作は近代に入ってからのものであった可能性もある。

148・149 はいずれも 19 世紀後半以降の瀬戸・美濃の筆立てである。

150 は 19 世紀中葉の瀬戸・美濃の鉢で外面は蛸唐草、見込みは環状松竹梅文の染付けが見られる。他にも 3 個体同じ鉢が収蔵されている。

151 も 19 世紀中葉の瀬戸・美濃の鉢である。全部で 11 個体同じものが存在する。収められていた箱には「現住印荔雄代」「猪口二十人前入」「嘉永五年子九月吉日」とあり、荔雄が嘉永五年（1852）に入手したことが分かる。

152 は 18 世紀に肥前で作られた白磁の壺と考えられる。底部は 8.4cm と比較的大きく肩がはる。口縁部は直立し、口径 11.0cm を測る。

153 は 152 とセットで木箱に収納されていたが、年代・生産地とも一致するもののもともと別の個体であったと考えられる。内面全体に白色物質が認められアルミナの可能性が指摘される。

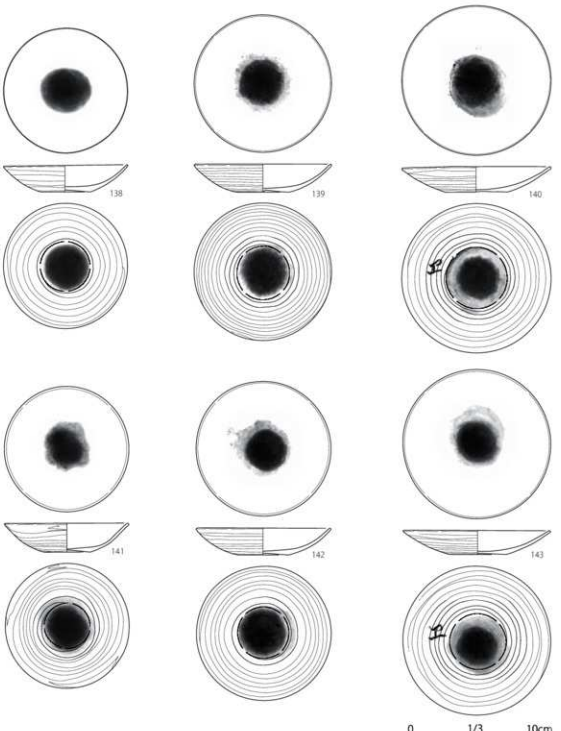
3　分析

民俗資料のうち、近世東泉院の頃の陶磁器を見てきたが、結論的には、資料があまり残存していないことが明らかとなった。ただし、134 の肥前の大皿や 138 から 146 のかわらけなどの存在が注目される。134 の作られた 18 世紀後半は、1709 年から 50 年長期間住持を務めた光盛の後、十三代覚雅から十六代尊淳のころである。その間、十四代淳盛は追放処分となり、東泉院が醍醐寺報恩院末寺から高野山宝性院末寺に変更になったり、十五代隆尊の頃、寛政 2 年（1790）には火災により客殿が焼失するなど東泉院にとっても激動の時代で

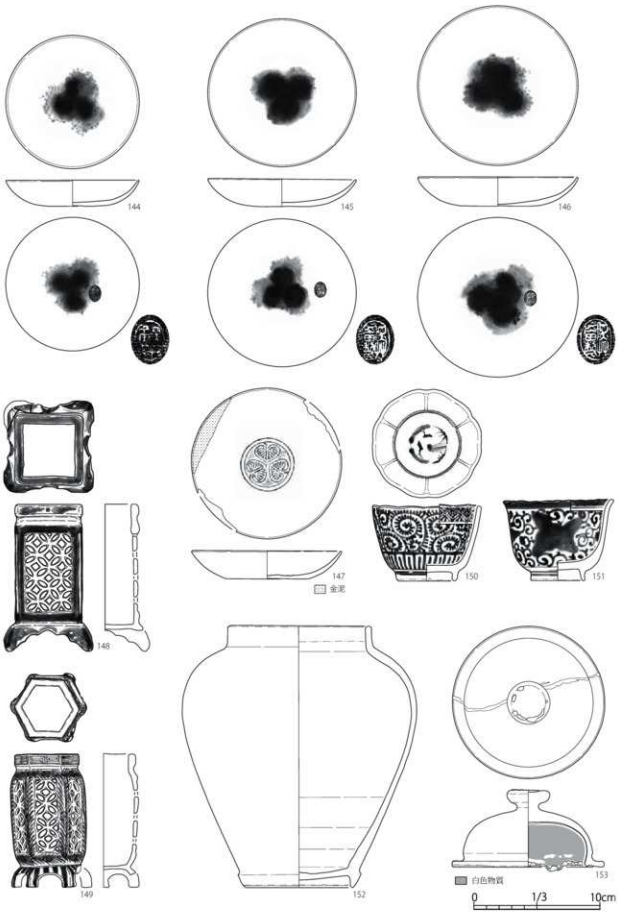
あったと推察される。この頃に、当時としては珍しい大きさの肥前大皿をどのような経緯で入手することができたのか、興味深いところであるが、今回の資料だけでは詳細を明らかにすることは出来なかった。今後、文書史料などとの統合により入手経路が明らかになる可能性もあるため、注視していきたい

さいごに

資料は物を言わない。だからこそ、私たちはひとつのモノを単なる物質として捉えるのではなく、モノのもつ意味を多角的に追求する必要がある。今回の試みでは、決して重要な歴史性、結論を導き出すことは出来なかった。しかし、今後も他分野との学際的研究により東泉院の歴史に迫っていきたいと考えている。



第 73 図



第 74 図

第３表　民具資料観察表

番号	胎質	民具資料 No.	挿図番号	図版番号	時代	推定産地	器種	装飾・特徴
133	磁器	1610	第 69 図	PL.13	19c 前～中	肥前	大皿	染付　蛸唐草文　底部銘「太明成化年製」 錆継ぎ
134	**磁器**	**2610**	**第 70 図**	**PL.13**	**18c 後半**	**肥前**	**大皿**	**染付　内面菊牡丹文　底部銘「太明成化年製」** **底部目跡 10**
135	磁器	2611	第 71 図	PL.13	19c 中	肥前	大皿	染付　内面牡丹双蝶文　底部銘「乾」カ 底部目跡 6
136	**磁器**	**1974**	**第 72 図**	**PL.13**	**19c2q ～ 3q**	**肥前**	**大皿**	**志田窯　端反形　輪花　染付　墨弾き　雲鶴文** **底部目跡 6**
137	磁器	2330	第 72 図	PL.13				
138	**土器**	**3638**	**第 73 図**	**PL.13**		**京都**	**かわらけ**	**胎土白色　内ぐもり　外面ヘラ削り調整**
139	土器	3637	第 73 図	PL.13		京都	かわらけ	胎土白色　内ぐもり　外面ヘラ削り調整
140	**土器**	**3640**	**第 73 図**	**PL.13**		**京都**	**かわらけ**	**胎土白色　内ぐもり　外面ヘラ削り調整** **体下部墨書「エ」**
141	土器	3635	第 73 図	PL.13		京都	かわらけ	胎土白色　内ぐもり　外面ヘラ削り調整
142	**土器**	**3636**	**第 73 図**	**PL.13**		**京都**	**かわらけ**	**胎土白色　内ぐもり　外面ヘラ削り調整**
143	土器	3639	第 73 図	PL.13		京都	かわらけ	胎土白色　内ぐもり　外面ヘラ削り調整 体下部墨書「エ」
144	**土器**	**3318**	**第 74 図**	**PL.13**		**京都**	**かわらけ**	**胎土白色　内ぐもり　三ツ星** **底部刻印「深草平田製」**
145	土器	3318	第 74 図	PL.13		京都	かわらけ	胎土白色　内ぐもり　三ツ星 底部刻印「深草平田製」
146	**土器**	**3318**	**第 74 図**	**PL.13**		**京都**	**かわらけ**	**胎土白色　内ぐもり　三ツ星** **底部刻印「深草平田製」**
147	土器	3641	第 74 図	PL.13			かわらけ	胎土赤褐色　見込陽刻三つ葉葵文 外面ミガキ調整　口縁部金泥
148	**磁器**	**3325**	**第 74 図**	**PL.13**	**19c 後～**	**瀬戸・美濃**	**筆立て**	**染付　四面透し彫　七宝繋ぎ文　足部漆継**
149	磁器	3332	第 74 図	PL.13	19c 後～	瀬戸・美濃	筆立て	染付　六面透し彫　七宝繋ぎ文
150	**磁器**	**1995**	**第 74 図**	**PL.13**	**19c 中**	**瀬戸・美濃**	**鉢**	**輪花　染付　外面蛸唐草文・見込環状松竹梅文**
151	磁器	1976	第 74 図	PL.13	19c 中	瀬戸・美濃	鉢	輪花　染付　毛彫り
152	**磁器**	**2384**	**第 74 図**	**PL.13**	**18c**	**肥前**	**壺**	**白磁**
153	磁器	2384	第 74 図	PL.13	18c	肥前	壺蓋	白磁　漆継　口受部打ち欠き 内面全体に白色物質塗布　擂み部溶着痕

第３節　東泉院出土灯明皿の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

東泉院は富士市今泉にあった古義真言宗の寺院で、今川・豊臣・徳川各氏らの庇護をうけて隆盛したが明治初期の神仏分離で廃されたとされる。今回、灯明皿に付着する白色や黒色を呈する物質について、その素材について検討するために、X 線回折、赤外分光分析、脂肪酸分析を実施することにした。

1　試料

試料は、No.105(R660) と No.96(R891) の付着物を剥離して、分析試料とした。いずれも白色、黄橙色、黒色を呈する。No.105 が白色部を中心に分析を、No.96 が黒色部を中心に試料を採取した。

2　分析方法

X 線回折

試料をメノウ乳鉢で磨砕した後、無反射試料板に充填し、リガク製 X 線回折装置 (Ultima Ⅳ Protectus) によって表 1 の条件で測定を実施した。なお、物質の同定解析は、Materials Data,Inc. の X 線回折パターン処理プログラム JADE9.6 を用い、リファレンスデータベースは ICDD の PDF2(Release 2013) を利用して該当する化合物または鉱物を検索した。

赤外分光分析

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて (すなわち吸収されて)、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域で波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数 (波長の逆数 cm-１で示す)、縦軸に吸光度 (ABS) を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に比較することで、未知物質の同定をすることもできる (山田 ,1986)。

微量採取した試料をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微 FT-IR 装置 (サーモエレクトロン製 Nicolet Avatar 370,Nicolet Centaulus) を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正，スムージング

第４表　X 線回折測定条件

装置	Ultima Ⅳ Protectus
Target	Cu（K α）
Monochrometer	Graphite 湾曲
Voltage	40kV
Current	40mA
Detector	SC
Calculation Mode	cps
Divergency Slit	1°
Scattering Slit	1°
Recieving Slit	0.3mm
Scanning Speed	1°/min
Scanning Mode	連続法
Sampling Range	0.02°
Scanning Range	2～61°

第５表　FT-IR 測定条件

光学系の構成	
光学系	Avatar System 370
光源	IR
ビームスプリッタ	KBr
測定アクセサリ	Centaulus
検出器	MCT/A
測定情報	
サンプルスキャン回数	64
バックグラウンドスキャン回数	64
分解能	4
サンプルゲイン	8
ミラー速度	1.8988
アポダイゼーション	Happ-Genzel
位相補正	Mertz

処理，正規化のデータ処理を施した後、吸光度 (ABS) で表示している。本調査における測定条件を第 5 表に示す。

脂肪酸分析

分析は、坂井ほか (1996) に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール (2:1) を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸 - メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム (ULBON,HR-SS-10, 内径 0.25mm, 長さ 30m) を装着したガスクロマトグラフィー (GC-14A,SHIMADZU) を使用した。注入口温度は 250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム (J&W SCIENFIC,DB-1, 内径 0.36mm、長さ 30m) を装着する。注入口温度は 320℃、カラム温度は 270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

3　結果

X 線回折分析 (XRD)

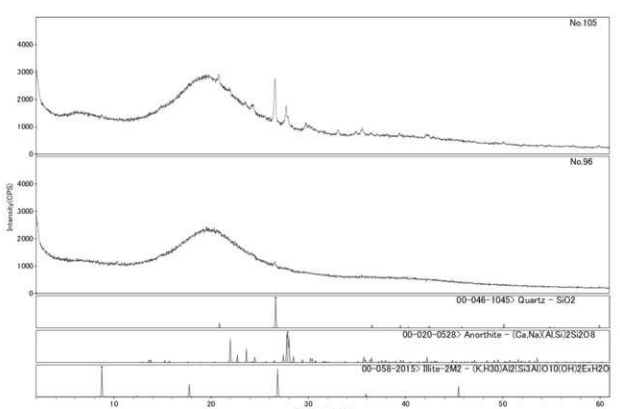
X 線回折図を第 75 図に示す。なお、図中上段に試料の X 線回折図、下段に検出された鉱物の参照パターンを掲げている。なお、文中で ( ) 内に示したものは、X 線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については、X 線回折分析では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを包括する大分類の鉱物名を使用している。

No.105 および No.96 から採取した白色物質の特徴として、20° (2 θ) 付近を頂点とするブロードな回折が観察される。なお、No.105 では、石英 (quartz)、斜長石 (灰長石 :anorthite)、雲母鉱物 (イライト :illite)、No.96 では石英の存在を示唆する反射が認められているが、これら鉱物の反射強度は弱い。

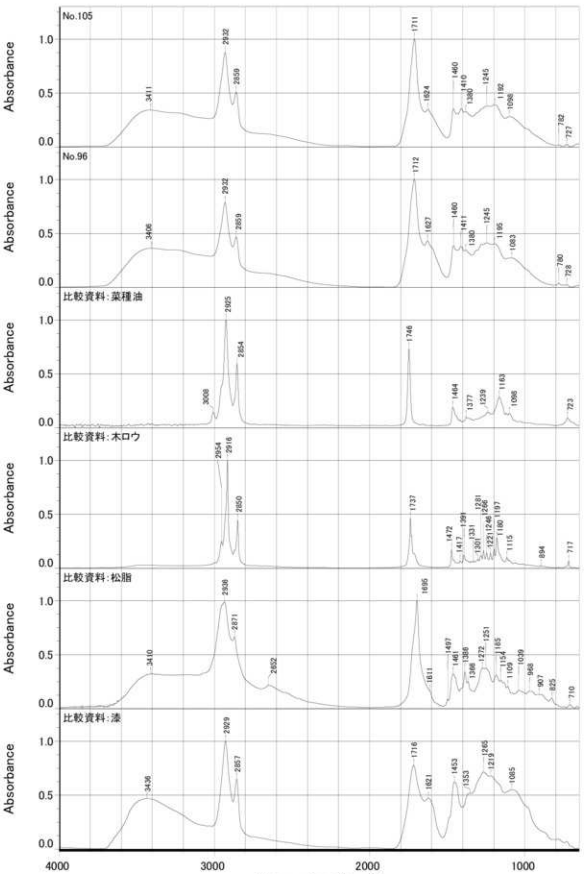
赤外分光分析 (FT-IR)

FT-IR スペクトルを第 76 図に示す。なお、図中には比較資料として菜種油、木ロウ、松脂、漆の実測スペクトルを併記している。

No.105 および No.96 から採取した白色物質の赤



第 75 図　X 線回折図



第 76 図　FT-IR スペクトル

外線吸収特性は相似し、2930cm-1、2860cm-1、1710cm-1付近の強い吸収帯と1630-1620cm-1、1460cm-1、1410cm-1、1380cm-1、1250cm-1、1190cm-1付近の吸収帯によって特徴付けられるほか、3400cm-1付近を中心に幅広く弱い吸収帯が認められる。なお、2930cm-1、2860cm-1の吸収帯はメチル基およびメチレン基のC-H伸縮振動、1710cm-1付近の吸収帯はカルボン酸のC=O伸縮振動、1630-1620cm-1付近の吸収帯はC=C伸縮振動あるいはC=O伸縮振動、1460cm-1、1410cm-1、1380cm-1、1250cm-1、1190cm-1付近の吸収帯はメチル基およびメチレン基の対称変角振動やC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。また、3400cm-1付近の幅広く弱い吸収帯はO-H基の伸縮振動と見られる。

脂肪酸分析

分析の結果、脂肪酸は未検出である。ステロールも少ないが、感度を上げた結果、コレステロールのみ検出される。

4 考察

白色粘土の可能性が指摘されていた両白色物質においてX線回折分析を実施した結果、僅かに石英などの造岩鉱物が検出されたものの、白色粘土と特徴付けるような粘土鉱物は認められない。おそらく埋没している際に付着した土壌が僅かに残っていたことに由来する可能性が高い。また、赤外分光分析においても、無機珪酸塩に伴う1100～900cm-1の極めて強い吸収が見られないことより、両白色物質が粘土ではないことが確認される。さらに方解石も検出されないことから、付着物質が漆喰等である可能性は極めて低い。したがって、これら付着物は、何らかの有機物と考えられる。

灯明皿の付着物質であることを前提に、FT-IRスペクトルの比較資料として菜種油と木ロウを取り上げたが、両白色物質には1750-1730cm-1付近に現れるエステルの特徴的な吸収を見ることが出来ないため、油脂や蝋として捉えることは出来ない。なお、パリノ・サーヴェイ株式会社では、試料の出所が既知の物質について、同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつかある(未公表)。白色物質のスペクトルを自社スペクトルデータベースでサーチした結果では、漆や松脂と比較的高いマッチング率が得られたものの、松脂と白色物質では官能基領域(4000～1500cm-1)において松脂の1700cm-1付近の吸収が白色物質ではやや高波数側にシフトしている点や、指紋領域(1500～600cm-1)におけるスペクトルパターンが一致しない。漆と白色物質についても官能基領域における漆のカルボニル基の1720cm-1の吸収が白色物質ほど特徴的に強くはない点や、指紋領域において漆の1270cm-1(フェノール)、1090cm-1(ゴム質)の吸収が白色物質では弱いことなど、スペクトルパターンが異なる。

一方、脂肪酸分析では、脂肪酸が未検出であり、分析後も白色物質にほとんど変化がなく、溶出した可能性がないことから、白色物質は有機溶媒に溶解する物質ではないと考えられる。検出されたステロールは、コレステロールである。コレステロールは動物由来のステロールであるが、土壌中には土壌生物由来のコレステロールが普遍的に含まれる(筒木・近藤,1997,1998)。検出量が微量であることや機器の感度を上げたことにより偶発的に検出された可能性が高い。

以上の結果、灯明皿の付着物は、白色、黄橙色、黒色などの色を呈しており、No.105が白色部を中心に、No.96が黒色部を中心に分析を行った。しかし、分析結果は両試料とも類似しており、No.105とNo.96の付着物は同様な物質で、有機物に由来する可能性が高いことが明らかにできた。この付着物は、油脂、蝋、松脂、漆とは異なる他の物質であるとみられるものの、今回の結果からその正体までを明らかにすることができなかった。今後、熱分解ガスクロマトグラフィー質量分析(Py-GC/MS)、あるいは炭素窒素安定同位体分析など、他の調査手法を取り入れて素材物質に関する情報を付加し、検証およびデータの蓄積を図ることが必要と思われる。

引用文献

坂井良輔・小林正史・藤田邦雄,1996.灯明皿の脂質分析.富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)第二分冊.財団法人 富山県文化振興財団,24-37.

筒木 潔・近藤連三,1997.泥炭地植物のフェノール性化合物,脂肪酸,ステロール組成.日本土壌肥料学雑誌,68,37-44

筒木 潔・近藤連三,1998.泥炭地の乾燥化と植生変化に伴う泥炭の脂質組成の変化.日本土壌肥料学雑誌,69,12-20.

山田富貴子,1986.赤外線吸収スペクトル法,機器分析のてびき第1集.化学同人,1-18.

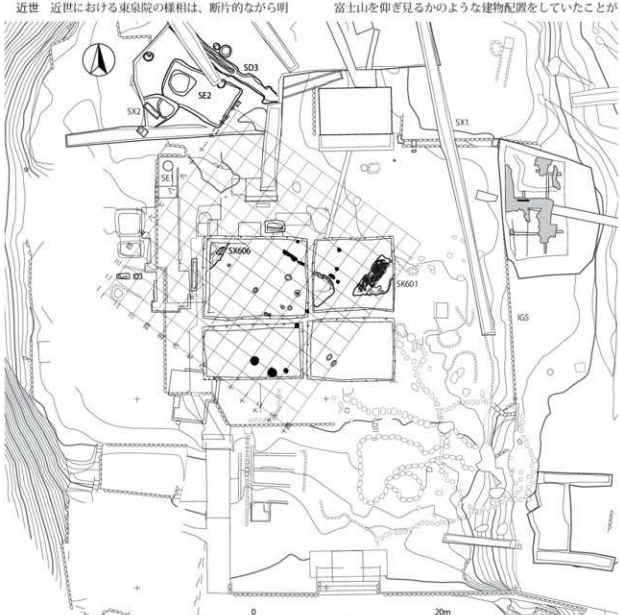
第５章　総括

本書での報告で平成 19 年度より、継続的に行ってきた調査成果の報告は終了となる。そこで今一度、報告済みの成果も含めてまとめを行うこととする。

中世　東泉院は遅くとも永禄元年（1558）頃には、現在の場所に境内を構えていたとされ、永禄３年(1560)には「富士山大縁起」を編纂している。発掘調査では、近世の造成土中から 15 世紀の遺物が比較的まとまって出土している。近世の造成や削平に伴い、その痕跡を明らかにすることは出来ていない。

近世　近世における東泉院の様相は、断片的ながら明らかとなってきた。その情報量は文書情報には到底及ばないが、17 世紀後半から 18 世紀前半には、商業ルートでは入手できない景徳鎮窯の碗を入手し、活発な活動の痕跡を見ることが出来る。それらの遺物は文書に残る寛政２年（1790）の火災により廃棄・片付けられたＳＥ２から出土した良好な一括遺物に見ることが出来る。

また、火災にあった主屋については確証がないものの、寛政９年（1797）に再建された主屋は絵図に描かれているような、東西南北軸に合わせた建物配置ではなく、富士山を仰ぎ見るかのような建物配置をしていたことが



第 77 図　検出された建物跡

第６表　東泉院の歴史と埋蔵文化財調査成果

今回の調査で明らかとなった。前述の寛政２年（1790）の火災の片づけを行ったＳＥ２と軸が一致することから焼失した建物も同じ向きで建っていたものと考えられる。

現存する東泉院時代の建物として蔵（宝蔵）が知られているが、これは棟札より安政４年（1857）の再建であることが明らかとなっている。安政地震によりそれまでの蔵が倒壊したためと考えられるが、その際に割れた瓦を廃棄した痕跡を今回の調査においてＳＫ601として検出した。

文久３年（1862）には、将軍家茂が東泉院に宿泊する際に、境内の土地をまわりよりも高くし、東西南北軸に合わせた建物配置に大規模に変更していることも判明した。

多分野との統合　民俗資料のうち、近世陶磁器類を考古学的方法によって資料化した。今回の調査で埋蔵文化財部門の報告は終了するが、今後も多分野の成果を注視しながら埋蔵文化財の調査成果を見つめなおし、東泉院の新たな一端を明らかにしていくこととしたい。

写真図版

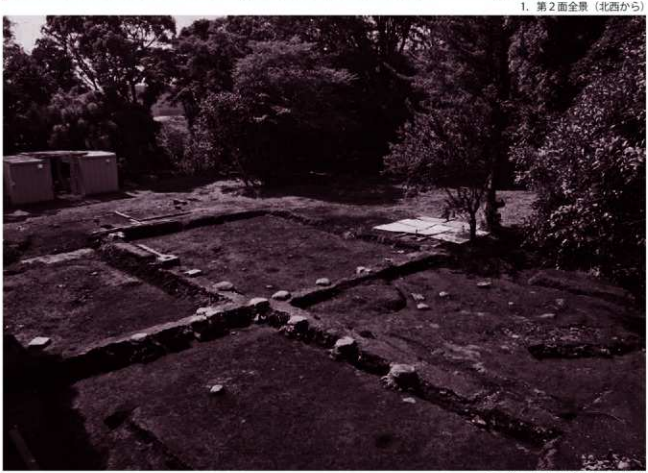
PLATE

扉写真

安政から文久年間に建築された主屋（客殿）の礎石の下層から、発掘された建物跡。礎石のほかに、安政地震で倒壊した蔵の瓦を一括して廃棄した土坑（SK601）も見える。検出された建物跡は出土遺物の年代と絵図の検討から、寛政９年（1797）の建物跡と推定される。

（第３章第２節参照）

1. 第2面全景（北西から）



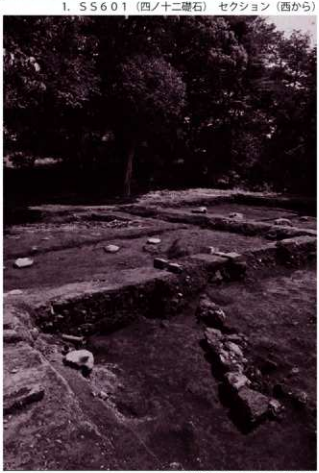
2. 全景　黒色土検出（南東から）

PL.2　調査

1. ＳＳ６０１（四ノ十二礎石） セクション（西から）

2. ＳＳ６０３（七ノ十一礎石）検出（北西から）

3. ＳＳ６０２（六ノ十一礎石）検出（北西から）



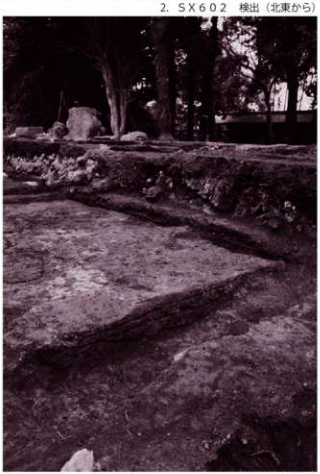
4. ＳＸ６０３　全景（北西から）

5. ＳＸ６０３（北西から）

1．ＳＸ６０２　検出（北東から）

2．ＳＸ６０２　検出（北東から）

3．ＳＸ６０１　検出（北東から）



4．29Tr　南北セクション東壁（北西から）

5．ＳＸ６０２　検出（北東から）

1. 第２面検出全景（南西から）

2. ＳＸ６０４・ＳＸ６０５　検出（北西から）

3. ＳＸ６０５　検出（北から）

4. ＳＸ６０５　南北セクション西壁（北東から）

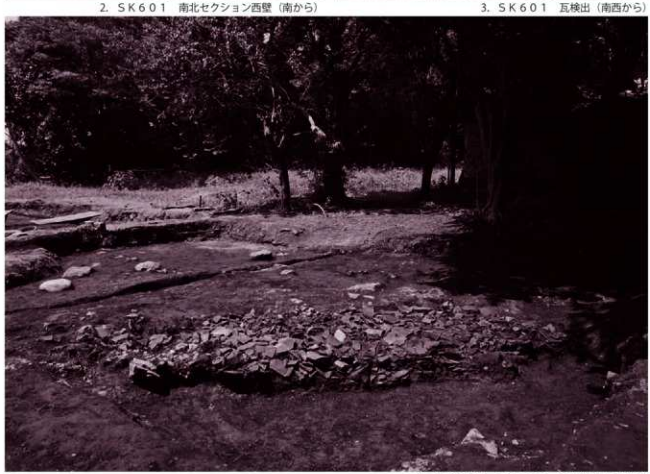
5. ＳＸ６０４　検出（南から）

6. ＳＸ６０４　南北セクション東壁（西から）

1．ＳＫ６０１　検出（南東から）

2．ＳＫ６０１　南北セクション西壁（南から）

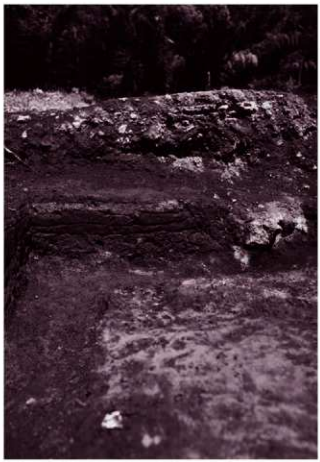
3．ＳＫ６０１　瓦検出（南西から）



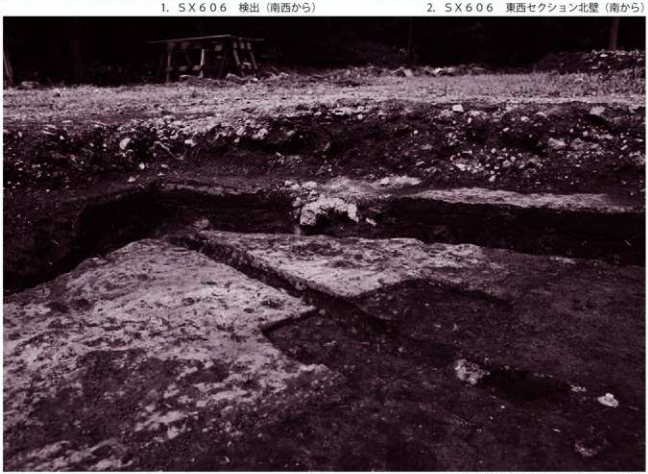
4．ＳＫ６０１　南北セクション西壁（南東から）

PL.6　調査

1. ＳＸ６０６　検出（南西から）



2. ＳＸ６０６　東西セクション北壁（南から）



3. ＳＸ６０６ＳＫ１　完掘（南東から）

1．埋め戻しの様子

2．ＳＳ６０２　埋め戻し（北東から）

3．ＳＸ６０３　埋め戻し（北西から）

4．調査区　埋め戻し（南東から）

5．調査区　埋め戻し（南東から）

6．調査区　埋め戻し（南西から）

7．調査地　現況（北東から）

8．調査地　現況（北西から）

PL.8　出土遺物

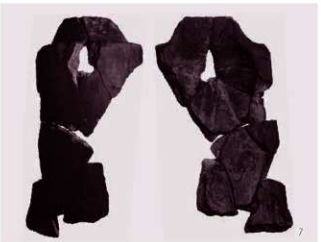
SK601 出土遺物

1

2

3

24

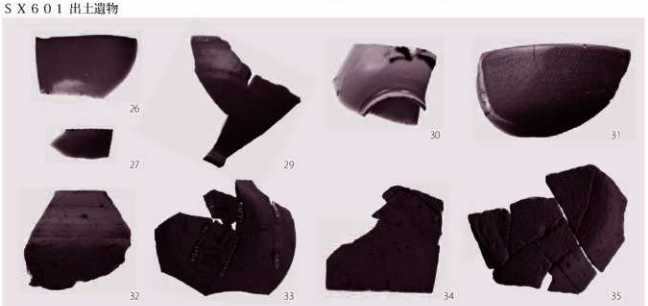

7

21

25

28

SX601 出土遺物


26
27
29
30
31
32
33
34
35

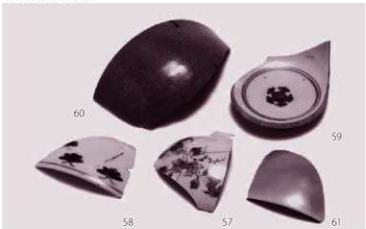
SX601 出土遺物

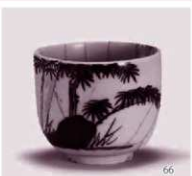
SX602 出土遺物

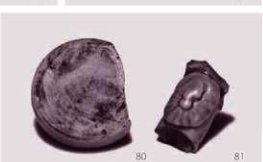
第2面 出土遺物

PL.10 出土遺物

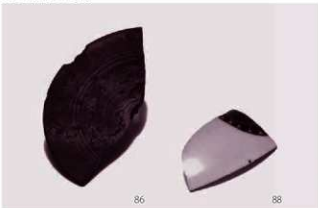
第２面出土遺物







第2面 出土遺物


86 88

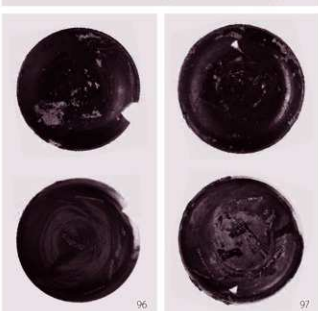
91

87

92

89 90

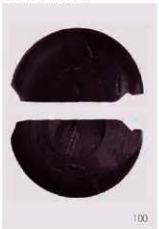
95 94 93

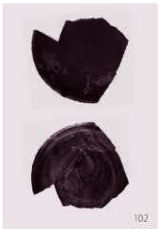

96 97

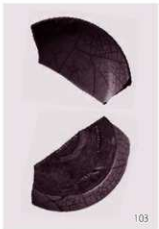
98 99

PL.12 出土遺物

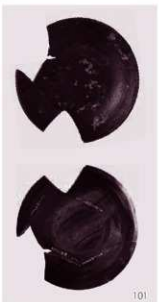
第２面出土遺物


100


102


103

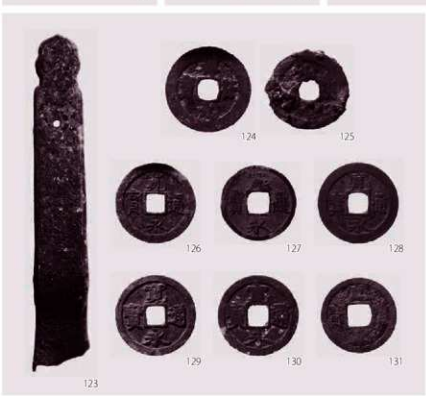
104


101

105

107

108


123

124

125

126

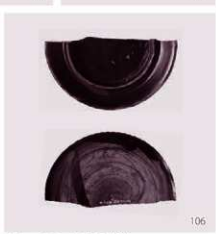
127

128

129

130

131


106

Ｐｉｔ６０３出土遺物

132

民具

133

134

135

136

137

147

153

152

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
シリーズ名	六所家総合調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	佐藤祐樹
編集機関	富士市教育委員会　（担当課：文化振興課）
所在地	〒417-8601　静岡県富士市永田町１丁目100番地　　TEL　0545-55-2875
発行年月日	平成28年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	地区名	調査期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
ぜんとくじじょうあと・とうせんいんあと	しずおかけん ふじし いまいずみ	22210	102	35°09′59″	138°41′12″	第１地区	20130531 / 20130924	286.557	本発掘調査
善得寺城跡・東泉院跡	静岡県富士市今泉								
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
善得寺城跡・東泉院跡	城館跡 社寺跡	近世		建物跡・庭池（礎石・土坑・ピット）瓦廃棄土坑		陶器 磁器 瓦 銭			

要　約

東泉院は遅くとも永禄元年（1558）頃には、富士市今泉の地に境内を構えていたとされ、永禄３年（1560）には「富士山大縁起」を編纂した密教寺院である。

これまでに行われた確認調査では、17世紀後半から18世紀前半以降に質の高い製品が多く、東泉院における大名家や公家などの接遇の際に宴会道具として使用したり、贈与された可能性が高い。

今回の発掘調査では、絵図との比較検討から、文久２年、寛政９年、寛政２年以前の建物痕跡を確認する事が出来た。寛政年間に庭池として使用されていた掘り込みは瓦の廃棄場として再利用されており（ＳＫ６０１），海鼠瓦などが比較的まとまって出土したことから安政年間に再建された宝蔵（土蔵）以前に、存在した土蔵に使用されていた瓦と推測している。

六所家総合調査報告書　既刊と今後の刊行予定

民　俗	平成25年3月刊行
古文書①	平成26年3月刊行
埋蔵文化財	平成26年3月刊行
建造物・庭園	平成26年3月刊行
聖　教	平成27年3月刊行
書　画	平成27年3月刊行
埋蔵文化財②	平成28年3月刊行
古文書②	平成28年3月刊行
古文書③	平成29年9月刊行予定
東泉院の歴史	平成30年3月刊行予定

六所家総合調査報告書　埋蔵文化財②

発　行　日　平成28年3月31日

編集・発行　富士市教育委員会
〒417-8601
静岡県富士市永田町一丁目100番地
電話　0545-55-2875

印　　刷　文光堂印刷株式会社

（富士市行政資料登録番号　27-47）